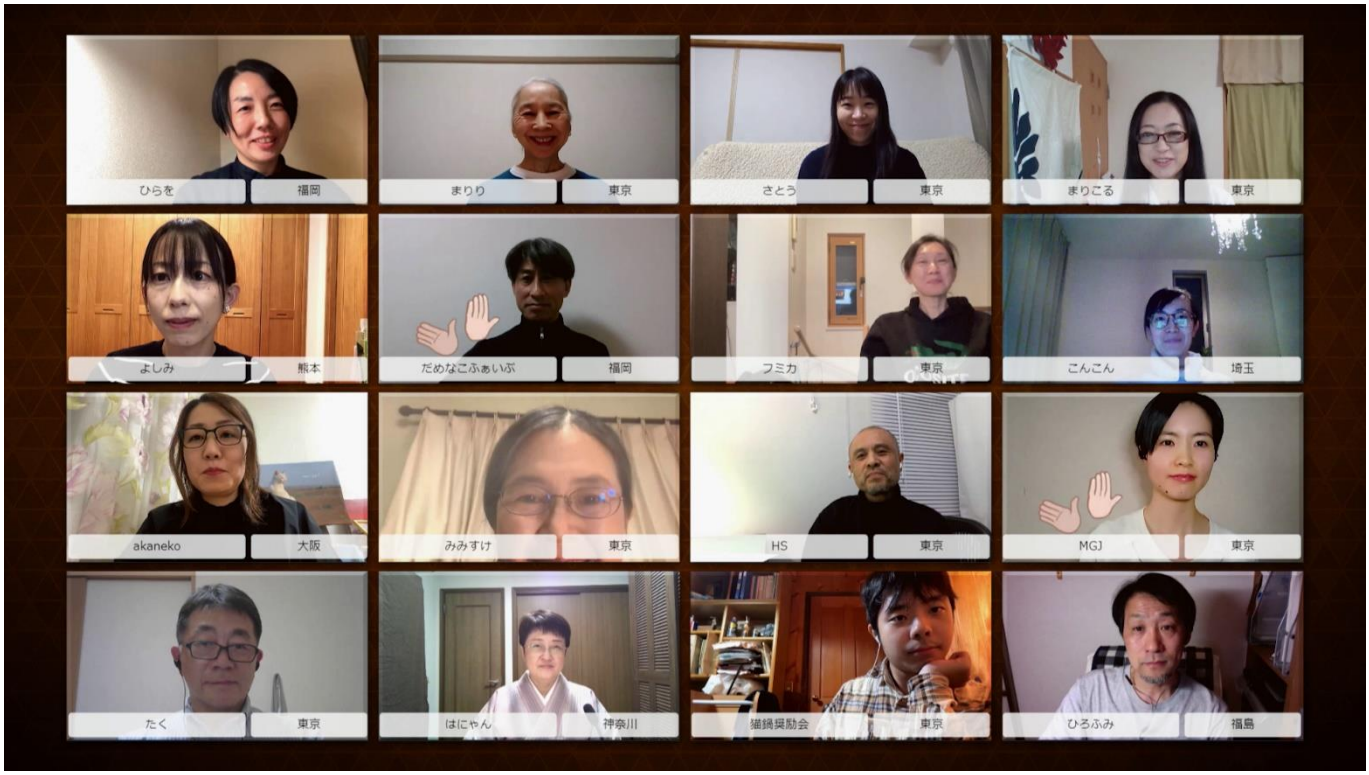
NHK アカデミア 第 28 回 <画家 山口晃>

山口晃：現代日本を代表する画家。いにしえと現代を独特の感性で描く。

皆さん、どうもお晩でございます。山口晃と申しまして、絵描きをいたしております。

あ、妙な感じですね。私から見ると、画面に皆さんが映っていて、どなたを見ていいのかさっぱりわからないですね。困ったな(笑)。お一人お一人とお話しできればいいんですけれども･･･代表の方ということになるとは思いますが、何か申し上げられればいいと思います。今日は最後までよろしくお願いいたします。



<時間と空間を自由にはみ出す>

成田空港の絵が映っておりますでしょうか。こんな絵を描いてございまして、これが成田空港の出発ロビーにあります。早速、ちょっとお伺いしてみようと思うんですけれども、この絵をご覧になったことがある方はいらっしゃいますか？

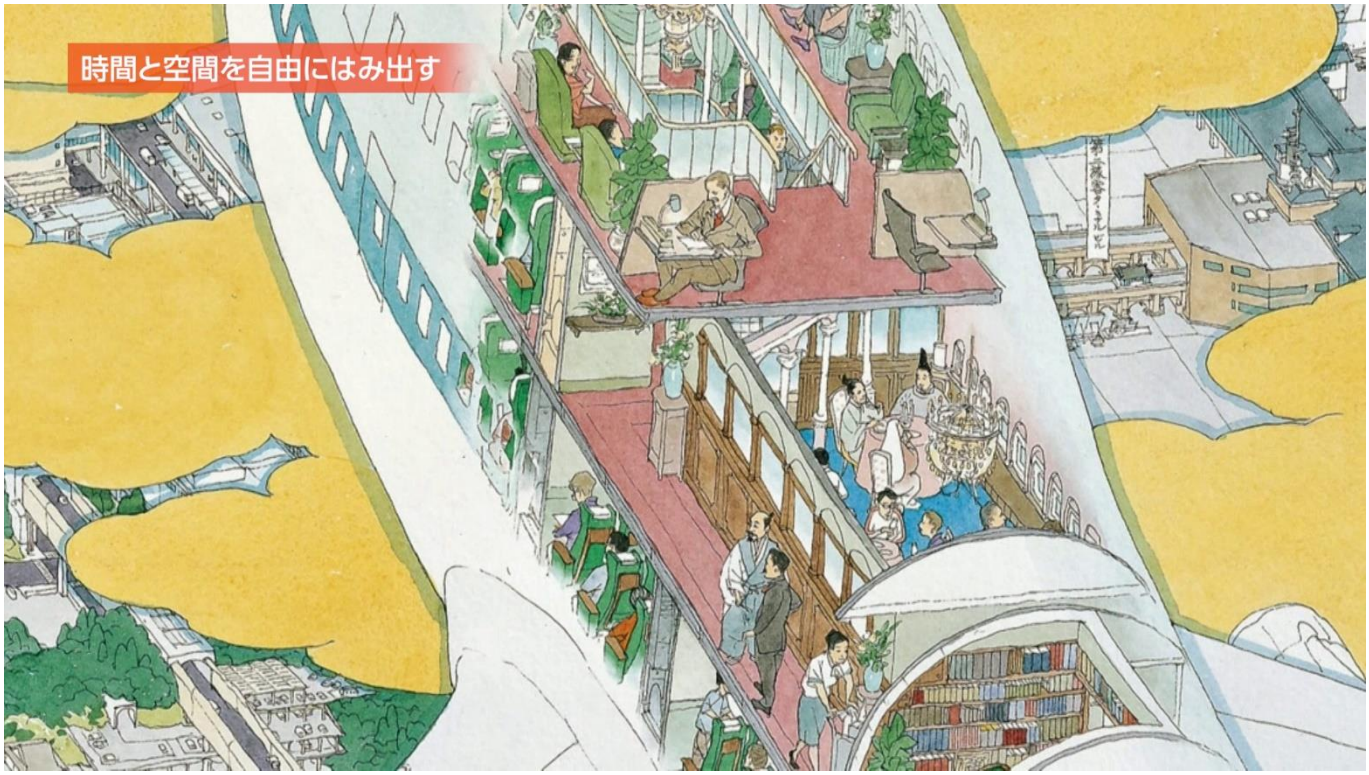
手が挙がっている人も･･･あ、お二人？そうですか。僕もこの質問をしたくなかったんですけれどもね･･･多分、誰も手を挙げないんじゃないかと思って。よかった。ありがとうございます。

これが出発ロビーにあるものですから、どういうことが起こるかというと、これにはちらっと目も留めることもなく、みんな先を急ぐんです。すーっと関税とパスポートチェックの方に行かれて、僕はこの絵の前に人がいるのを見たことがないんです。たまに子どもがチョロチョロチョロっと来て、「あっ」とか言って見上げているのを見ると、お母さんが「早くいらっしゃい」とか言って(笑)。

描いた身としましては、出発前の手持ち無沙汰といいますか、取りとめのない心持ちを、この絵を見てちょっと楽しく癒してもらえたらと思ったように記憶しております。

こちらの絵は2枚セットなんです。1枚に時間を使い切ったものですから、こちらの絵はかける時間がもうないということで、ご覧いただくとわかるんですけれども、結構、直線がメタメタな状態なんです。でも意外と飛行機って手でつくりますから、よく見るとボコボコなんです。そういう再現性は逆にあるのかなと思ったりもします。

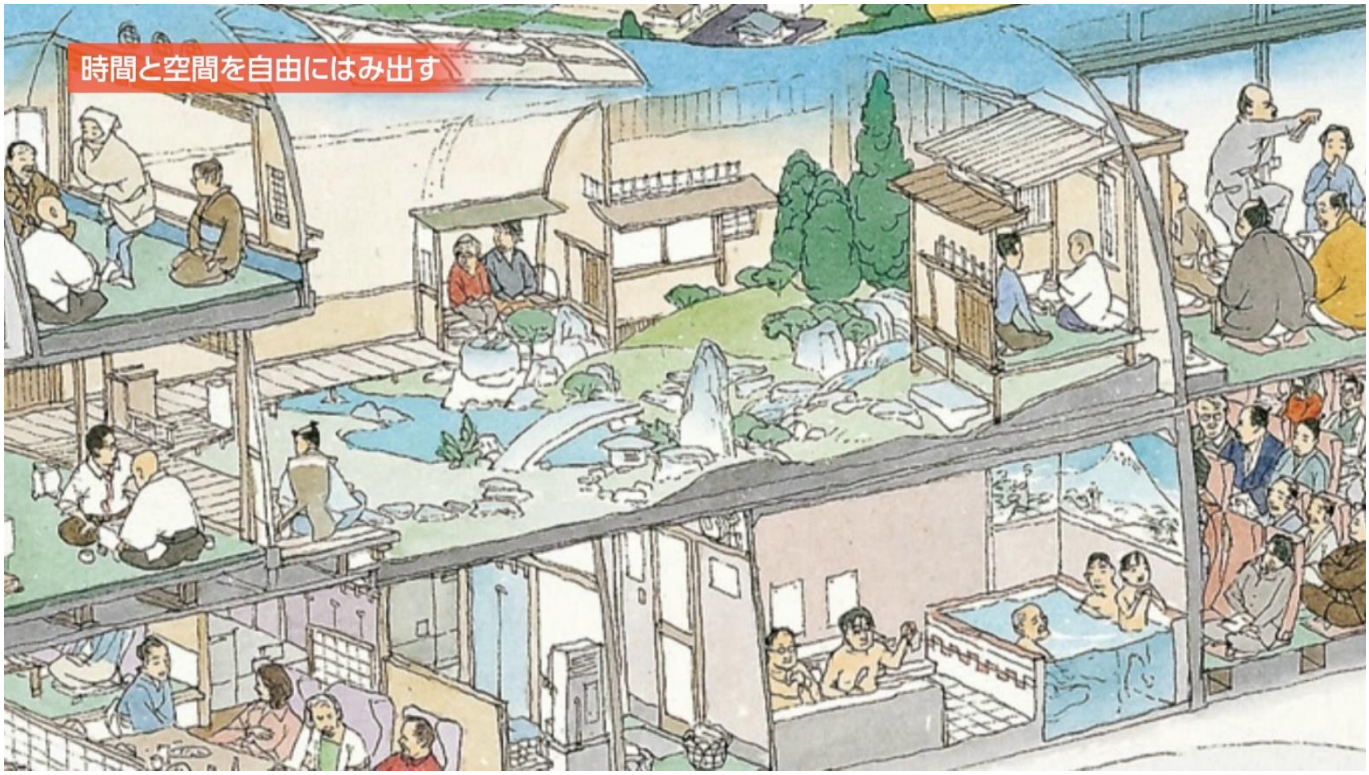
これを見ますと、俯瞰(ふかん)の構図で、金色といいますか黄色味がかった雲があって、なんとなく日本の古い絵というんですかね、そういう様式にのっとって描かれているのかなぁというのをご覧いただけると思います。



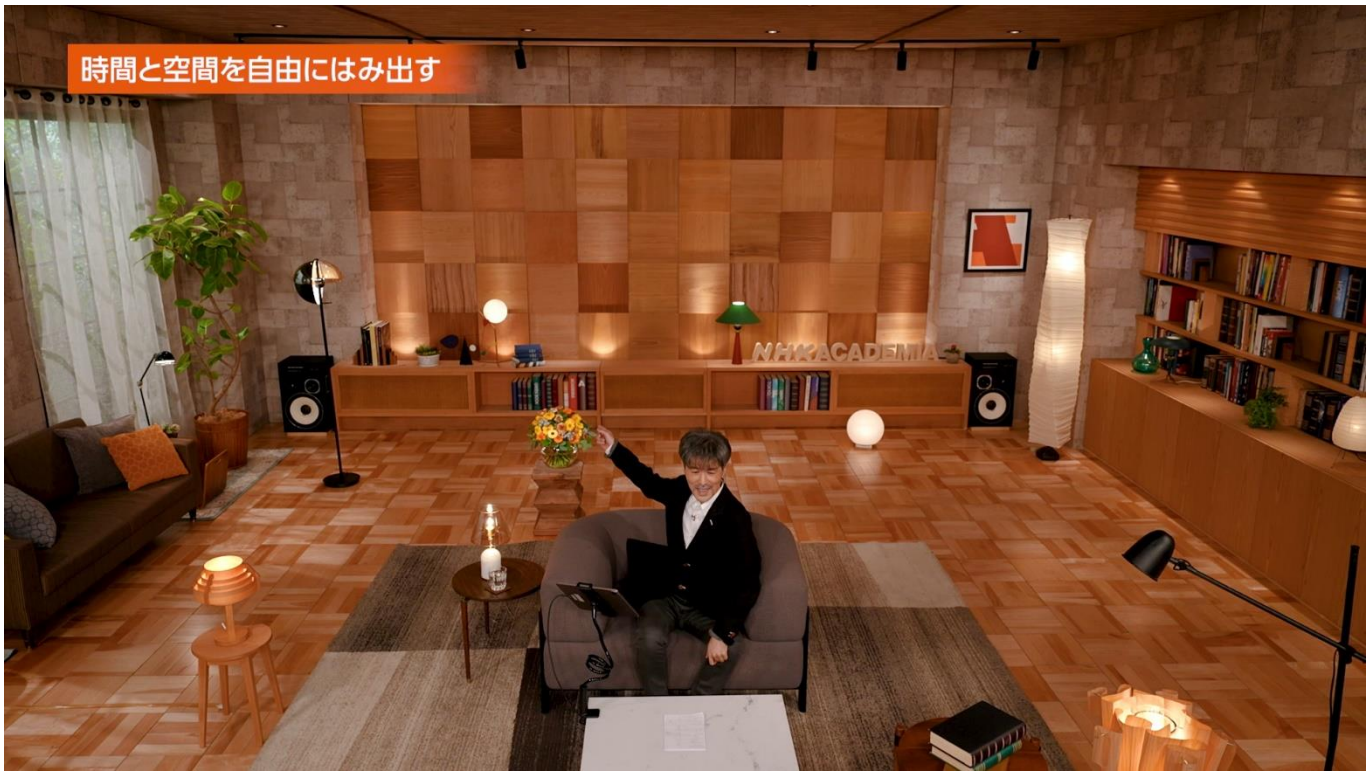
そんなのがどうも私の“売り”のようで、こういったスケルトンになっている様子ですね、こういうのを日本の古い絵でいうと「吹抜屋台」と言います。源氏物語絵巻などで言いますと、家の中を天井の上からのぞいたような、そういう様式になっていて、飛行機をのぞき見て、しかもその飛行機がちょっとありえない3階建てになっている。ですから、そういうちょっと“古い絵の様式”プラス必ず“自分から発する”というのを忘れないようにしてやっています。

そして描いてみると、自分で飛行機を1台作るようなものですから、いろいろと考えるんです。何を真っ先に考えるかというと、会議で真っ先にはねられそうなことを考える(笑)。飛行機に本を積んでみたらどうか。「そんな重いものを誰が積むんだ」ということなんですけれども、そういうのを積んでみるわけです。そして、“吹き抜け”をつくってみたりしてね。「無駄だ。ここに客を積め」と思うんですけれども、そういう“無駄”が楽しくてしょうがない。

この飛行機という構造体をつくっていくと、その構造体に導かれてシーンが決まってくる。描こうと思っているんですけれども、それはもうちょっとその場をしつらえることによって自然とわいてくるような自分の記憶であったり、自分が見た世界であったり、二重写しになっているようなもので作りを進めていくことがあります。ですからこういう古い様式を使っても、必ずいつも様式の方の“過去”を向くというのではなくて、様式を経て、まだどうなるか分からない“未来”、未知の方を向くというのを、古い構図を使うときほど気をつけてやっております。

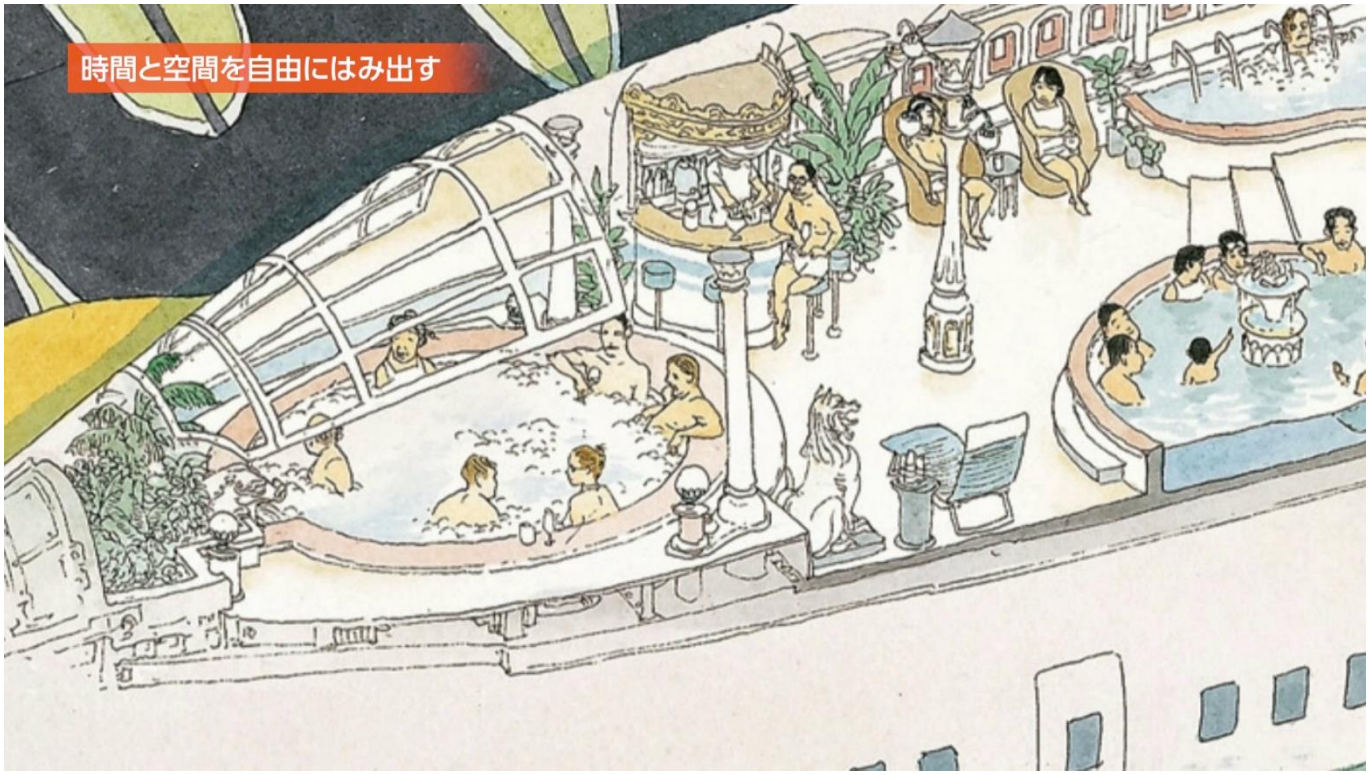


プラス、自分の趣味と言ってはいけないんですけれども･･･これも 3 階建てで、なぜか飛行機の中に日本庭園があるわけです。「水が流れて、石橋があって、一体これで飛行機がどれだけ重くなるんだろう」とか、そういうことは考えないんです。ひょっとしたらね、これは全部 FRP(繊維強化プラスチック)かもしれないですし、つくろうと思えばつくれるかもしれない。そしてちょっと“待合”にもなっていて、こういうのが好きなんです。なぜ好きかはわからないんですけれども、ちょっと隅っこがあると、そういうところに一隅をつくりたくなる。

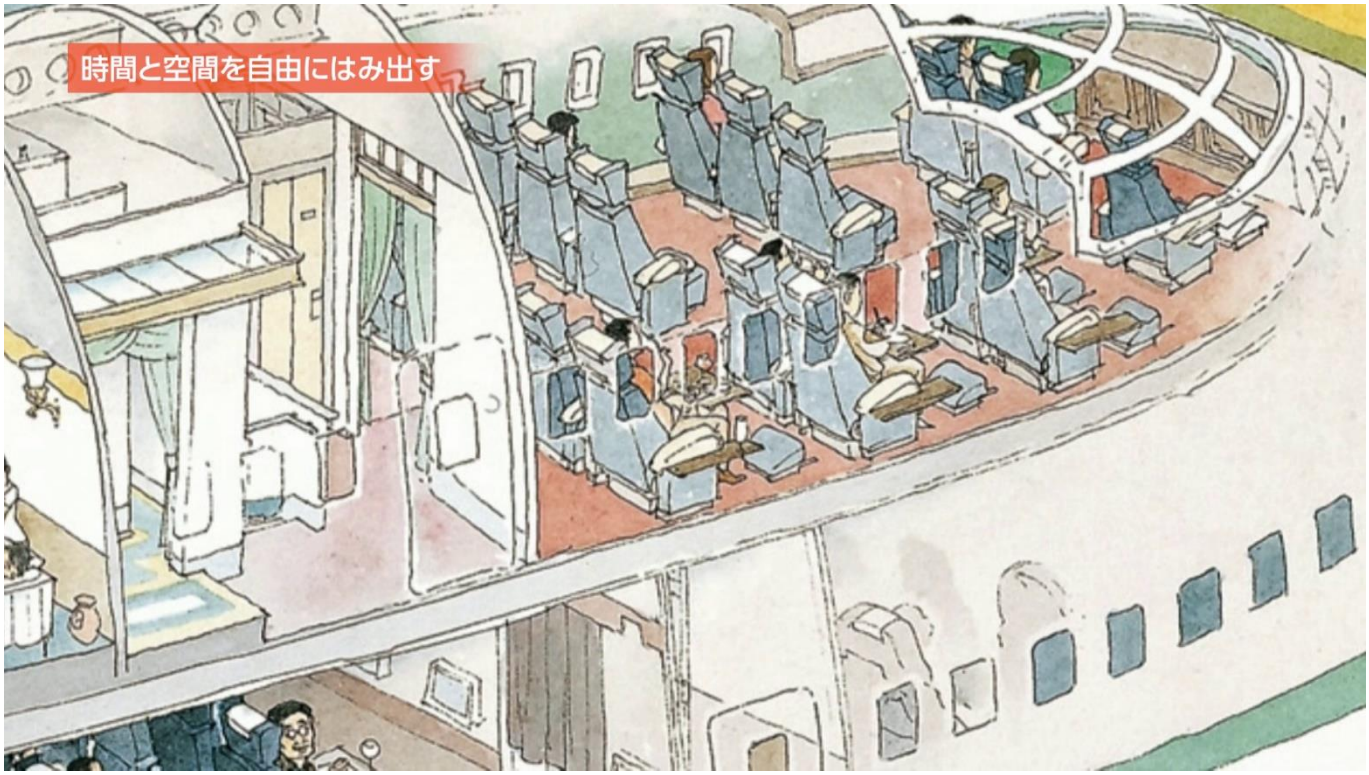


スタジオのすてきなセットもそうですけれど、「そこは遊んでいるな」というのがあると、ちょっと低く、段

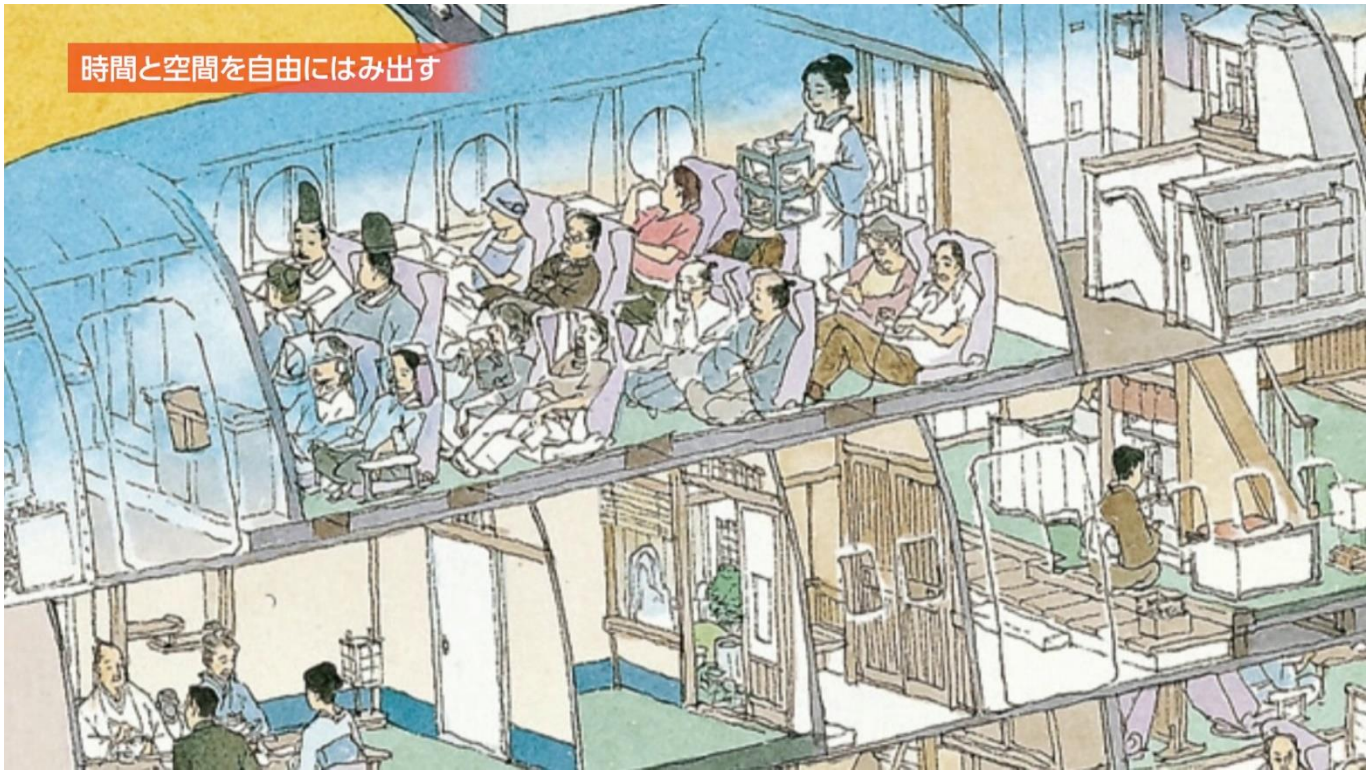
ボールか何かで屋根をかけてみたくなるなんです。そうすると途端に居場所ができますでしょう。古い絵というのは、やっぱり水墨画然りですけれども、目が絵の中に入っていって、人間の体が絵のサイズに縮んでしまって、何がしかの体験をするという仕掛けに満ちておりまして、自分もシーンを描くとき、描こうと思って描くシーンはあまりないんです。どんどん連想が連想を生んで、イメージがイメージを用意してくるというようなことでございまして、最初からあまり考えないんです。考えるのは別のときにやって、絵が始まると、絵の転がるのに任せると言いますかね、そういう感じでつくっていきます。自分でどこに何を描いたかなんて全然覚えていないんですよ。だから久しぶりに見ると、楽しいんですね。



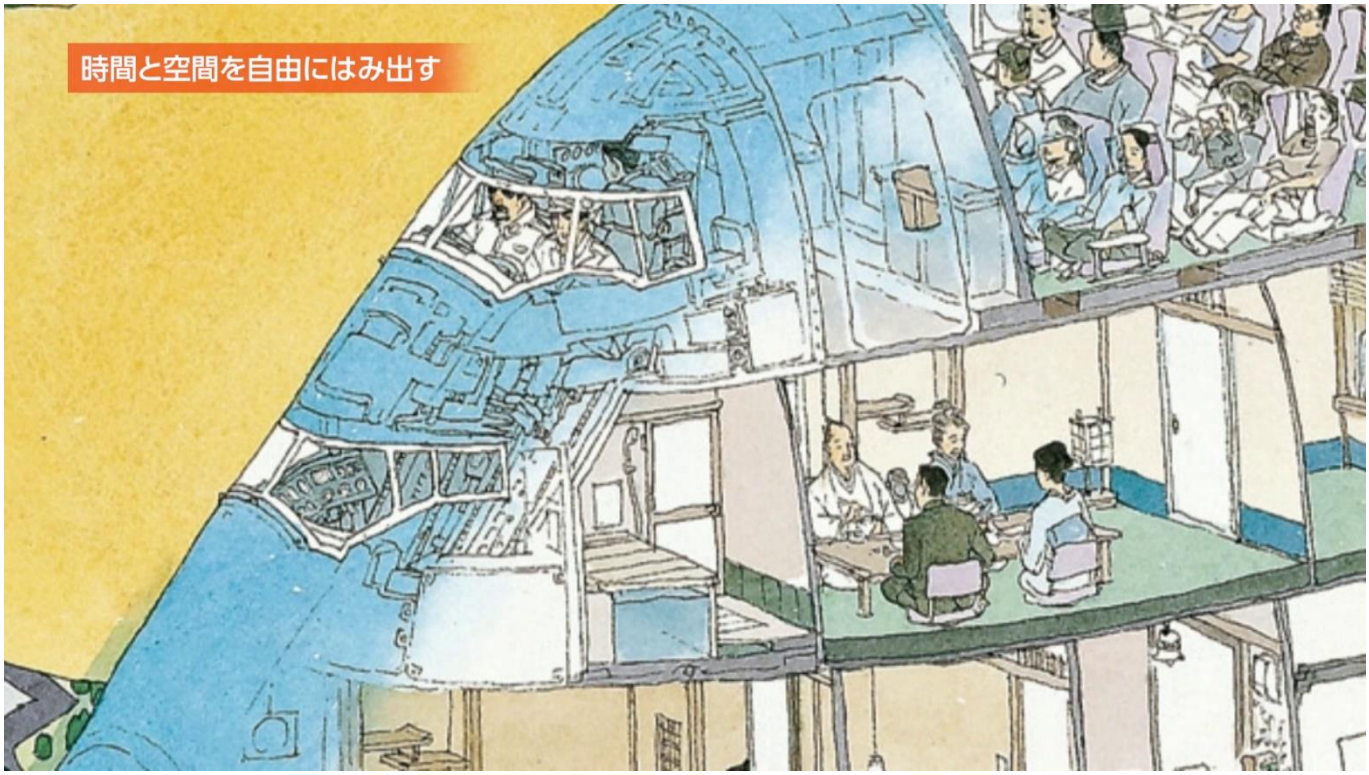
ここに、“スパ”があるわけですよ。スパっと(笑)。無駄ですねぇ。いいですね。無駄最高！天蓋などもついていて、いいですね。1杯飲むところもあって。一応、水着着用なんです。脱いでもいいかなと思ったんですけれども、「裸はやめてください」と言われたものですから、「分かりました」ということで。いろいろ塩梅(あんばい)というものがございますね。



ファーストクラスっぽいものを描いてみようとするんですけれども、乗ったことがないから知らないわけです。線がガタガタですね。定規を使っている時間がなかったんだなぁなんて思ったりしています。



これはビジネスクラスぐらいなんですかね、ファーストクラスなんでしょうかね･･･畳の上に座椅子が置いてあって、ちょっと飛行機が斜めになったら、全員、ザーッとすべり落ちそうで怖いですけれども、こういうのも座興のうちといいますか･･･。

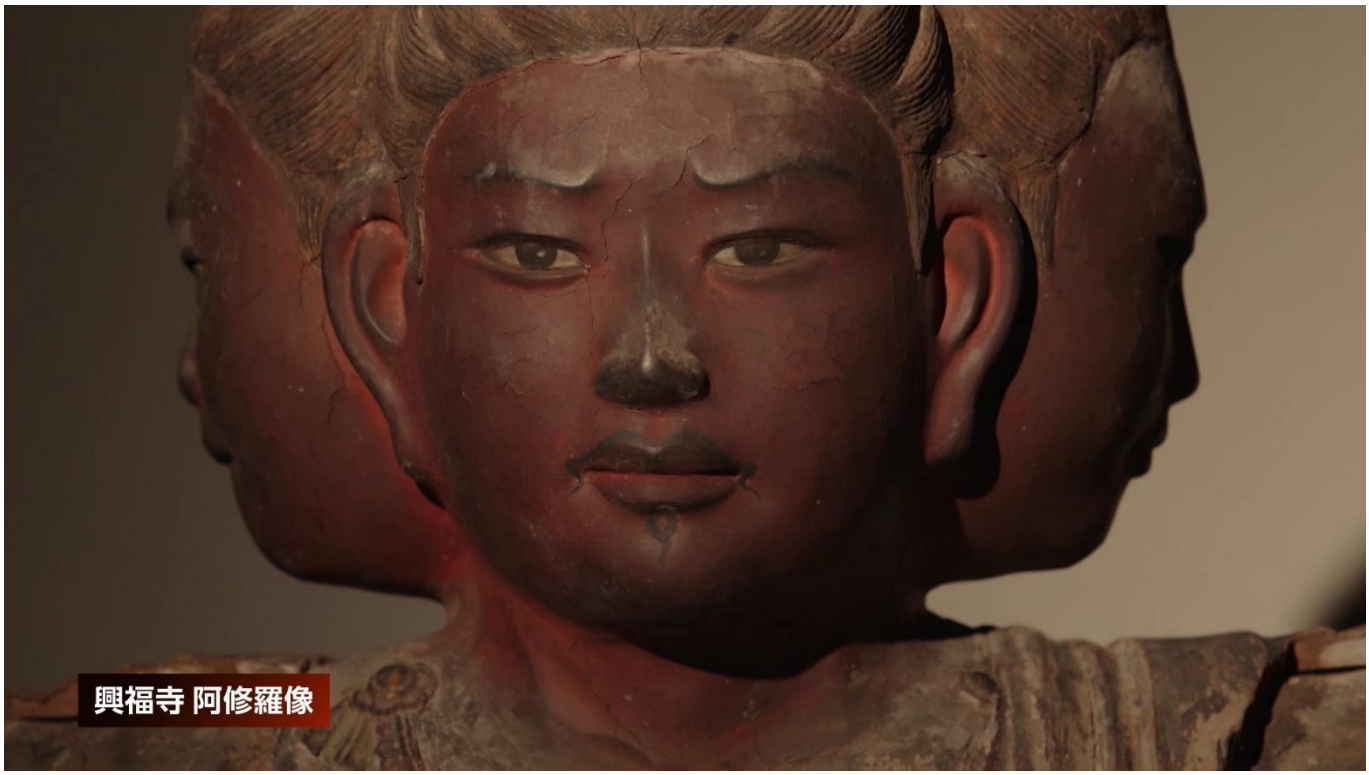


なぜかコックピットが無駄に2階建てになっているんです。こういう“メカ心”は、やっぱり私が子どもの頃にいっぱい見たテレビ番組の記憶なんでしょうね。そのギミックが自分の心をなでていく時の“なで心地”というんですかね、アレが呼んでくるんです。絵を。この“なで心地”のためにはどういう絵が必要かなというと、こういうものができてきて、そうやってできたものがまた違う“なで心地”になって、なでたり、なでられたり、それを形にしたり、形がまた「こっちよ」というので、始まるとひたすらキャッチボールをしていくような、そういう感じです。

全部俯瞰(ふかん)なんですけれども、お気づきになったかどうか、人物というのは、もうちょっと起き上がっているんですね。ただ俯瞰(ふかん)で、それがアイソメトリックかというとそうではなくて、それをやると顔が見えなくなってしまうんです。だから人物というのは、もうちょっと起きている。俯瞰(ふかん)で、顔が隠れてしまうところを起こして、その代わり、足元は見下ろした位置で。これは何かというと、人の記憶の図なんですね。人が人を思い出す時は、顔は自分と同じ高さにあって、足元というのは下にある。ですから、こういうのを描いていく時に、日本の絵って何だろうと思って、様式にまず身を飛び込ませるということをやってみたんですけれども、描いていくと、これは見たものを描いたのではなくて、見たものを飲み込んで、それを再構成した絵なんだなというのが、描いているうちにだんだんわかってきたりしました。ですから、こういう様式をやるというのは、かつての日本の絵とつながって、その先にどういう絵が描けるだろうと、そういう一つの型稽古と実験、それと個人の楽しみ。こういうパターンをいろいろやって、いろんな古い型というのを飲み込んで、それをどうこの先展開できるのかなというのを、ふだんやっておるところでございます。

<山口ワールド炸裂(さくれつ)！「四天王像」>

そういう古い絵をいろいろやってみるとまたわかるというのがあって、四天王という方角を守護する仏さんがいるんですけれども、それを描いてみようと思ったことがあります。これは東大寺の戒壇堂の四天王像ですね。土門拳か誰かが、ばっちりのライティングで、あのアングルが見られるのかなと思って行くと、それはなかなか見られない。ちょっと違うと言って、みんなが歯ぎしりするお堂があるんですけども(笑)、すばらしいのには変わりないです。その絵を描こうと思ったときに、奈良のお寺を回ったんです。やっぱり 3D ですからね、そして、塑像だったりするので、これはやはりちょっと絵と違うなというのを再確認してきたんです。



そんな中で興福寺の「八部衆の像」、思い浮かばれますでしょうか。阿修羅像ですとか。あの像というのは脱

乾漆かな、漆で布を貼ってある程度かたどったあとに、仕上げは筆で描いているんですね。そういう筆の柔らかな線で表情が出てきて、これは面白いなと思い、そして異様に生々しいんです。あれは本当に子どものような女の人のように柔らかい。それにはっとするんです。そういうのを何かひとつ描いてみて、信仰心とかは大してないですけれども、やっぱり何か人が、人型のものに、でも人でないもの、絵というメディウムとして封じ込められたときに、どういうものが描けるか、いにしえの人が描いたように、そういう封じ込め方ができないかしらというのでやってみたんです。

※映像（開始点 13 分 53 秒）とあわせてご覧ください。

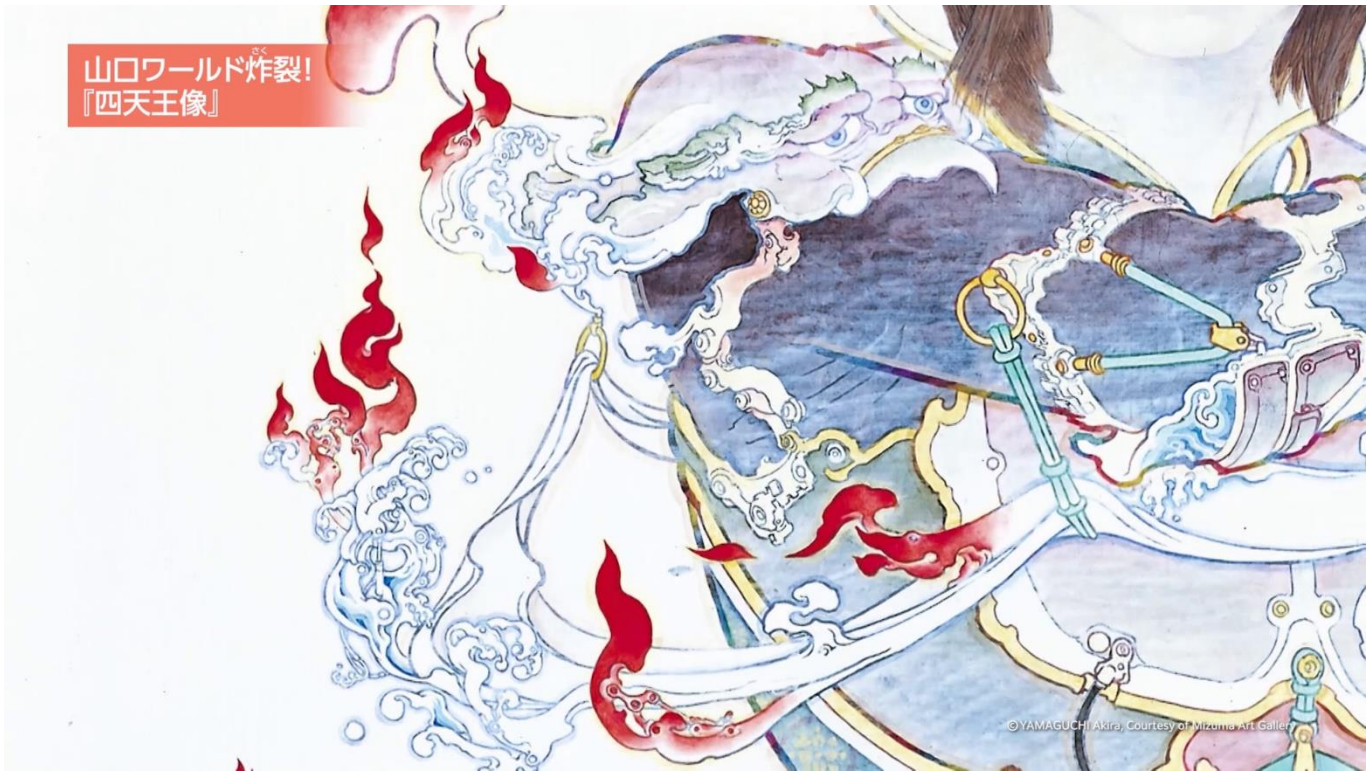
© YAMAGUCHI Akira, Courtesy of Mizuma Art Gallery

『持国天』

© YAMAGUCHI Akira, Courtesy of Mizuma Art Gallery

『増長天』

やっぱり頭でつくっていると、これは無理だなということで、このときはモデルさんをお願いしました。モデルさんをお願いするとき、見て描きすぎると、やっぱり「見て描きましたね」という絵になってしまうんですね。そうすると、何かひとつ止まるんです。現実の人間で止まってしまうんですけれども、それを自分で飲み込んで、もう一回出てくると、その絵の中に何かが生まれるという状態になります。つまり、何かを描いた絵から、絵が何かになっているという状態にしたいというのがありまして、描いたあとに一度モデルさんから離れまして、自分でまた顔をつくり出していくんです。そうしてできた絵です。

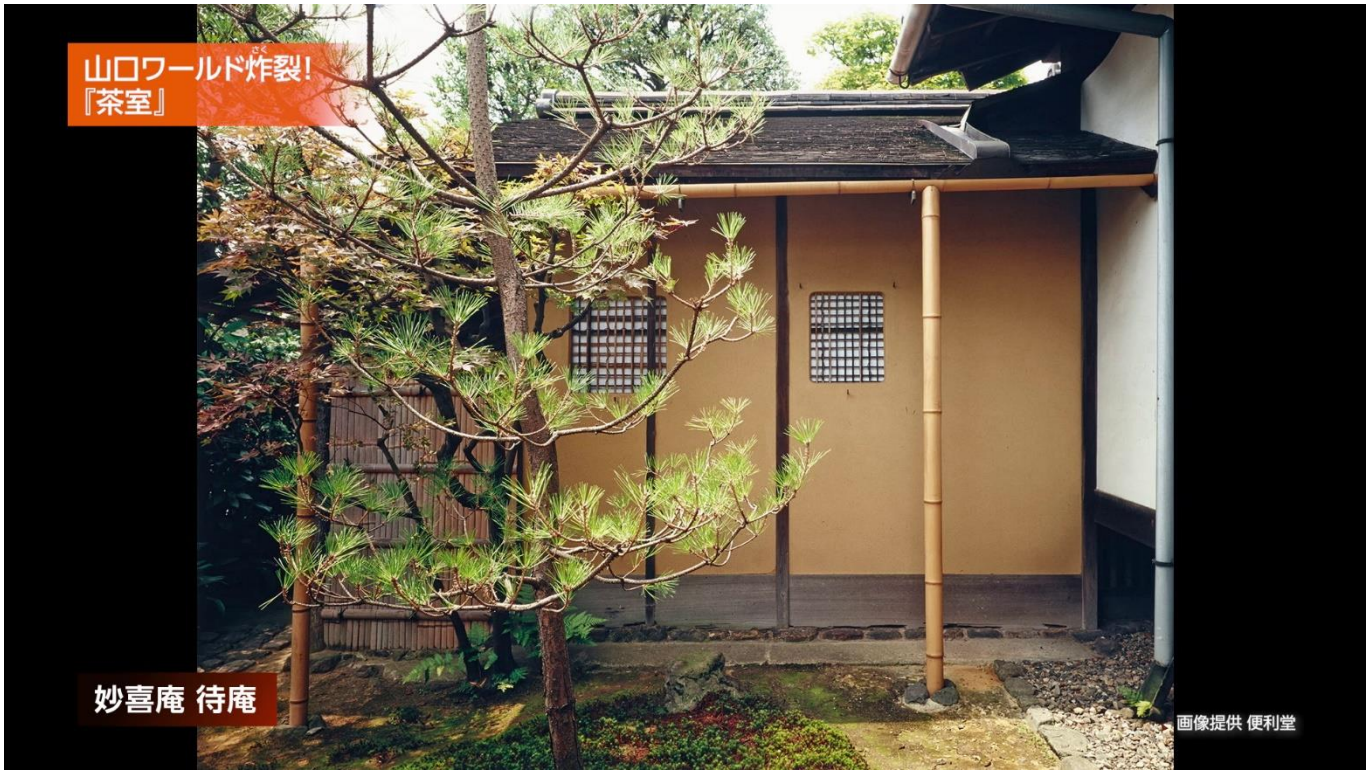


自分では七転八倒というか、どうなんだろうと思いながらやったので、良いか悪いかわからないんですけれど

も、変な生々しさは出たなと思います。また、モデルさんの生きた人間というのとはちょっとだけ違うところにひょっとしたらいけているかもなと、自画自賛ですけれども思います。絵は止まっていますね。止まっているからこそ、その図像をずっと見ていられて、その時間が反転して絵の中に時間が流れ始める。炎という揺らめいて上がるものを、目でずるずるするっと追っていくと、火がゆらめき出すんですね。そういう運動性を火に込める。あと、水の波頭なんかも描いているんです。波頭がこの人の周りを巡り出して、ザパンと立つと、そこに炎がサッと立つ。そういうイメージですね。

こんな絵を４体、描いてみまして、「何かを写す」という２次的なものではなくて、「絵である〇〇」という、その絵としての１次的なものになるように考えて、なるべく作るようにしております。

<山口ワールド炸裂(さくれつ)！「茶室」>



これは妙喜庵 待庵ですね。山崎の合戦の山崎にあるお茶室で、千利休の遺構ではないかと言われている、いかした茶室です。

これはたまりませんね。あの“わら壁”。なめたくなるでしょ。手ではなくて、やっぱりこの舌でなめ上げて、テクスチャーを感じたい。ああいいなと思ったときは、まねた方がいいんです。それはもう心をしめられてしまっているということですから。そこに飛び込んで、寸までまねしてみるんですけれども、最後にやっぱり考えないといけないのは、「じゃあ、現代だったらどういうふうなことになるだろう」ということ。千利休が現代に生きて、あのように急ごしらえでお茶室をつくったら、どういうものをつくるかなと考えるんですね。それによって、先ほども言いましたけれども、過去に向いていた様式の表面をまねすることから、様式というものを使って、その様式が導く感覚によって、どこに行くか、それがどこに広がっていくかということに自分が開かれていくんです。

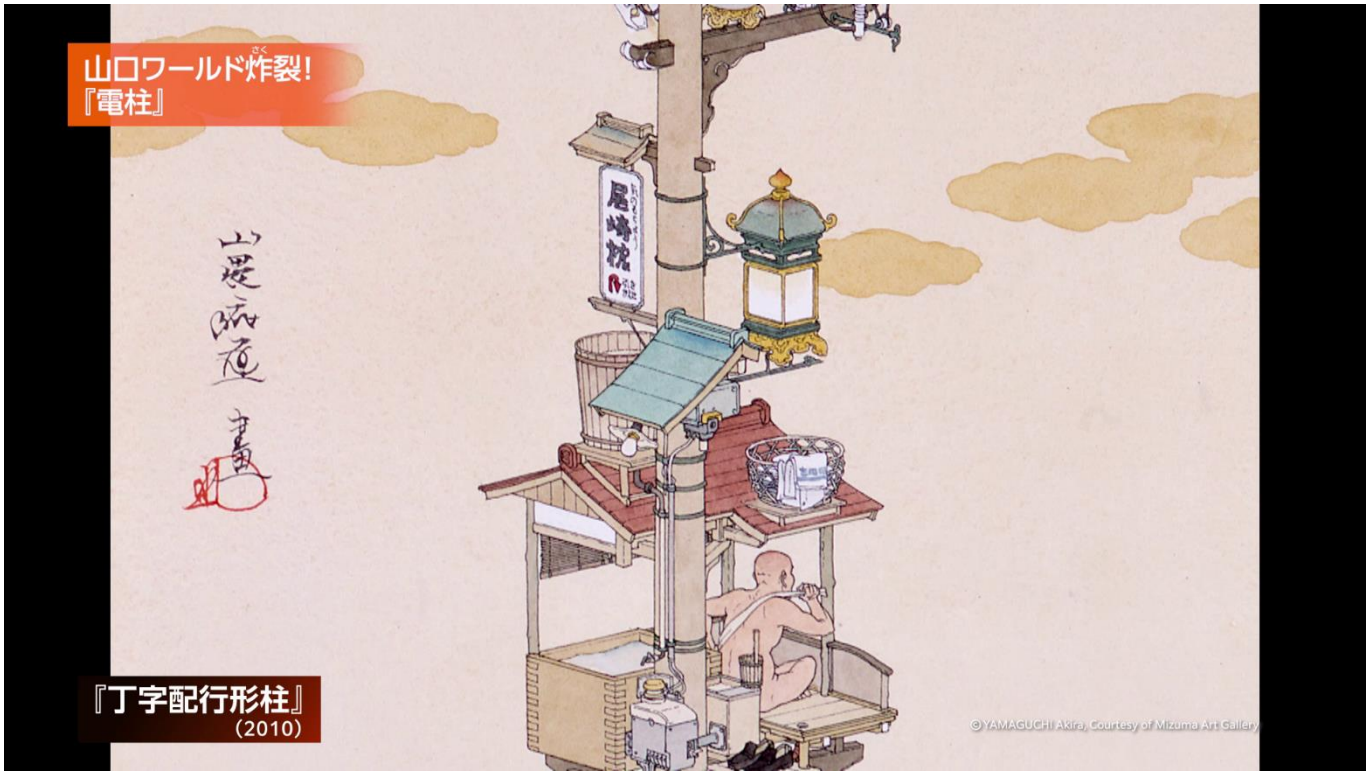
これは、ホームセンターに行くと売っているような“波板”と、“垂木”と言うんですかね、角材を買ってきまして、中はクラフト紙という荷物を包むような紙を使っています。ちょっと立派な“書”がかかっておりますけれども、これは印刷です。お軸はラップの芯に紙を巻いて作ったようなものです。全部、間に合わせのまがい物なんですね。裏は写っていないんですけれど、茶色のポリカーボネートでつくってありまして、これと垂木の組み合わせは最高なんです。現代におけるマジックの取り合わせではないかと、お互いがお互いを引き立て合って、3倍ぐらいの値打ちになる。ひとつ何かをやってみるときには、未知を向く。そうやって未知を向くということは、参考例がないわけです。そこにおいては、無手勝流にならざるを得ないんですけども、その無手勝流というのが貴重なんです。利休がわび茶にどんどん傾倒していったとき、お茶というのは茶器自慢だった。「こんなに高いものだよ」というときに、雑器を持ってきて「これをここに置くとどう？」と言って、みんなが見たことのないような価値がそこに生まれる瞬間というのを提示していくんですね。そうすると、もう彼のやりたい放題なわけです。その周りがいないですから。だから一番手というのは自分のやりたいように、自分の感覚の赴くままにやっていくと、そこに様式があとからついていくんです。

茶室をつくっている時点で後追いなんですけれども、ポリカーやったときにポリカーから開かれていく。そこら辺に使われている素材なんですけれどね。変な有機性と木材の方は四角四面に切られているちょっと転換があって･･･あれはなかなか面白かったですね。ですから、そういう日常使いのものから“美”を立ち上げていく。“美”は何かというと、またそこに戻って考えるのも楽しかったりするんです。

<山口ワールド炸裂(さくれつ)！「電柱」>

現代のもの、例えば「電柱」。こんなのも私なんかはビンビンくるんです。“くる”というのは感覚的なこともそうなんですけれども、単純に美的な要素というんですかね。例えば、これは写真としてフレームで区切られ

ていますけれども、そうすると、そこにコンポジション、電線と電柱によって線分が生まれるんです。その比率によって、ある種のリズムですとか、「あ、ここ気持ちいい」というのが生まれたりします。それから電柱の半分より上のところに、ポリバケツみたいな円筒形のものがあると思うんですけれども、変圧器なんですね。そういった同心円にパッと発する力を持った形態と、それを垂直につなぐ引き下げ線というのがいちばん上の線から下がっているんですけれども･･･もう、口で言っても多分とんちんかんだと思うので、絵にしてみるんです。



※映像（開始点 22 分 43 秒）とあわせてご覧ください。

まだこのころは、くどく描いてしまっているんですね。「ああいいな」という要素を、ちょっとくどめに描いてみて、そうすると「ああそういうことね」と、見ている人が気付くんです。やっぱりそうやって抜き出した時点で、かなりピンポイントで目が行くようにはなっているので、その上くどくしてしまうと、これはちょっと違うんじゃないかなと最近は思うようになっていまして、もうちょっとシンプルにした方がいいだろうなとは思っています。

「あ、この電柱、そういう面白いこと、起こってないかしら」。それをちょっと取り出して、場所をスッとずらしてあげるだけで、思いのほか“美”というのが、私たちの生活の中にはあふれているのではないかと、そういうのをやってみたわけです。こういうことを言ってもね、みんな大体「ぽかん」とした顔をするんですよ。誰にも通じない。誰も通じないんですけれども、そこはやっぱり掘っていく。別に伝達がしたいというのではなくて、その感覚を掘っていきたいんです。そのときに、ご覧になる方も、伝わらないよというのではなくて、私の方を見ていないで、私と同じ方向を見て、私の肩越しにちょっとそれを見てみる。そうやって、伝達として伝わるというよりは、こちらの心の震えというのが振動として共振していくというんですかね、そういう方がむしろ自然かしら。「面白いでしょ」と言って、困った顔をしてうなずいていただくよりは、「何か分からないけれども、うん、なんか･･･」ぐらいでお互いに止まってしまうあの感じ。無理に言葉にしていかないというんですかね。そのものを取っていくインデックスくらいなんでしょうね、作品というのは。もちろん、その何かからまた浮き上がった作品っていう、さっきで言えば紙であったり、ポリカ―っていうもの自体を使っち

ゃうんで、そのメディウムが言ってくる。また、それ自体にもなってたりして、何重のものが重なっているんですね。だからある部分でインデックスであるのに、ある部分ではそのもの自体になって、すっかり忘れてしまった過去の自分がそこに凝縮されて、それが今の自分に「お前はこういうことを思っているんだよ」というようなことを言いかけてきて、「そうか、俺はこんなことを思っていたんだ」と、絵に教えられたりもするんです。

何か分からないけれども呼ぶんですね、何かが。そうすると、手を動かす。ものを使う。そうして形になっていくので、自分の作品の説明は本当に困ってしまうんです。「作品に聞いてください」って思うんですけれどね、“あの人たち”しゃべらないんですよね。

<東京 2020 オリンピック・パラリンピック>

“アートポスター”という枠があって、20 人ぐらいおやりになる中の一人に入れてもらいました。オリンピックとパラリンピックでやって、私はパラリンピックで何か描きなさいと言われて描きました。

実際にこういう競技はないですけれども、アーチェリー流鏑馬(やぶさめ)のような。なぜかわからないんすけれども、これだったんですね。これを思いついてから調べたら、実際、上肢欠損でアーチェリーをやってらっしゃる方がいらして、「本当にいらっしゃるんだ」というのがありました。下を見ますと、馬の足の部分が車いすなんです。この馬自体も実は何かあったんですね。そうやって、何かあったもの同士が一つの競技に。その後ろに当時の日本の状況というんですかね、パラとか日本を取り巻く状況というのを描いて、“開催国の今”を表しています。

これを描くまでにいろいろ葛藤があったということでございまして、その経緯を漫画に書きました。「当世壁の落書き」というもので、私の名前を入れて検索していただきますと、ちょっと長いんですけれども、そこに

大体のことは申しております。ここでお時間がないものですから、お手間ですけれども、それを読んでいただくと経緯が分かるようになっております。

※映像（開始点 27 分 32 秒）とあわせてご覧ください。

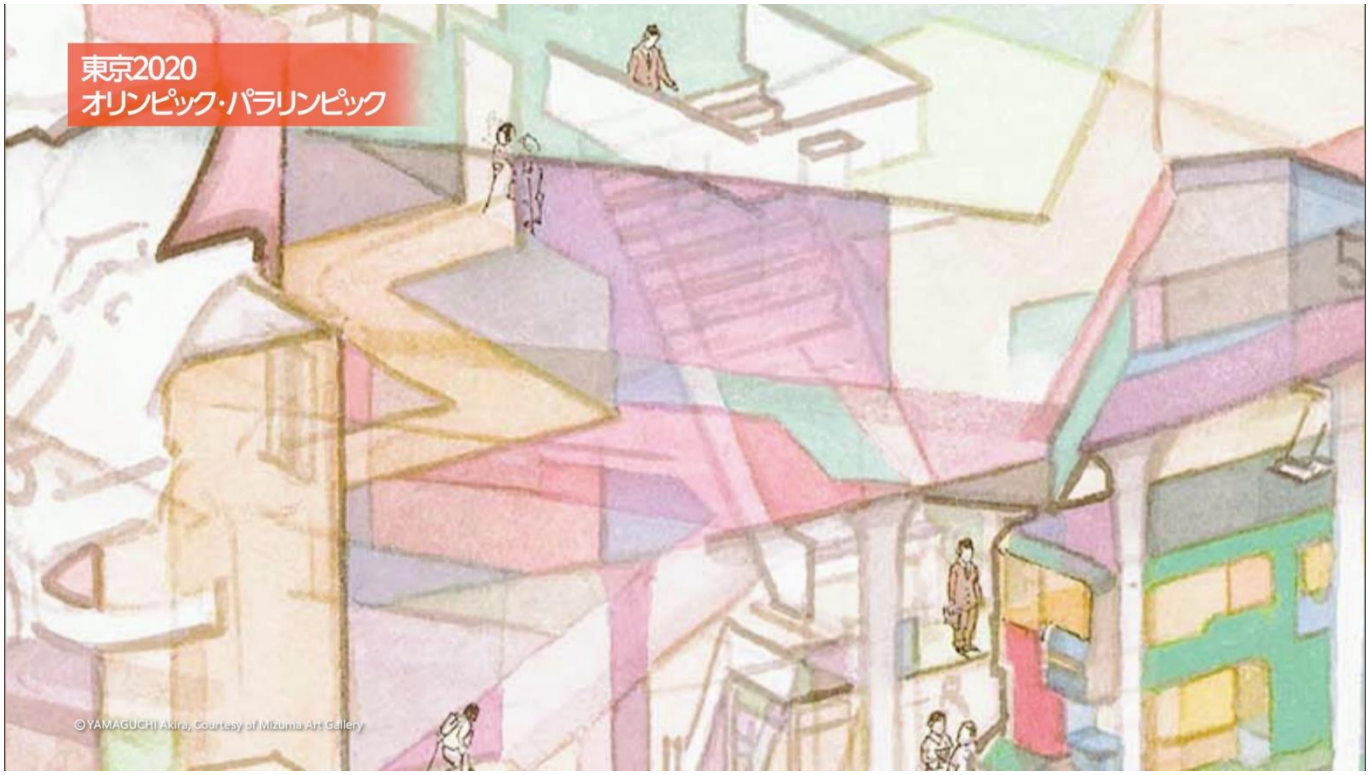
今この漫画を見ると、割とサラッと決めたように描かれておりましたけれども、3 コマ目と 4 コマ目の間に、長いしゅん巡がございました。これを言いますと、「嫌なら受けなきゃいいじゃない」とおっしゃる方はいるんですけれども、そのあたりを書いてございます。つまり、「『受けるの反対』が『受けない』」ではないんです。「アートポスターという枠自体をなくすか、受けるかなんです」というふうにいろいろと考えて思い立った。でも、枠をなくすというのは、もうその制度はいじれないですから、受けてできるだけのことをやろう。やっぱりこれは自分でも怖かったんですけれども、見てみたかったんです。この騒動でどういうことが起こって、誰が何を言うんだろう。巻き込まれて絵を描けなくなるかもしれないけれども、でも見てみたい。やっぱり絵描きのさがなんですかね。“目”になってしまうんですね。

そんな偉そうなことを言っても、描こうとすると、大したことは描けないわけです。先ほども申しましたように、自分自身こそ、そういう福島ですとか、パラリンピックの障害のある人に目を向けていなかったということを、むしろ突きつけられるところからでした。

大きく打ち上げられた「復興五輪」という言葉をお聞きになりましたかね。あれが大会の理念なんです。それがドーンと書いてあった。だから「どうなんですか。理念はちゃんと達成されていますか」と問うということにおいて、福島の海とその建屋を描いてみまして、女の人の着物も建屋の柄なんです。

そしてその建屋が東京に幻視される。東京湾に建屋が現れるというものでございまして、「忘れていないです。日常にかまけていましたけれども、ちゃんと覚えています」。そういう絵です。

うちのかみさんが、描いてる期間に骨折しまして･･･この松葉杖をついているのが、かみさんです。



地下鉄に乗ろうとして、駅などに行くわけです。行きますと、まぁ、エレベーターというのは端っこにあるんですね。「ホームはあっちですか？」というんですけれども、反対の反対の反対まで行くとようやく入り口があって、エレベーターでおりますとやっと出る。そして今来た分、戻らないといけない。そうすると、一緒に階段を降りた人はとうの昔にそこにいて、かみさんはまだ到達しない。そういう絵でございます。

だから、いちばん弱い人に向けて街をつくっておくと、いちばん安心なんです。どうなった時も。せっかくこうやって五輪でものすごいお金が動くわけです。そのときにちゃんとやったらいいんじゃないの？という話です。お金が動くのは別にいいんです。それで人が幸せになれば。パラリンピックという特別なことをやらなくたって、私たちが気づけば、毎日起こっていることなんです。全然気がついてなかったな。かみさんもね、ようやくその電車に乗れて、松葉杖で優先席のところへ行っても、みんな疲れていますから座っているんです。こちらも、みんな疲れているから、かみさんを支えてあげていいですよと思ったら、すっと立ってくれた人がいました。駅に着いて、先に行くその人の足元を見たら、義足なんです。結局、「お前がいちばんボンクラじゃないか」ということに気づかされたという１枚でございました。やってみていろいろと思いいたるところがございまして･･･そんなこともやっております。

<Q＆A　パート①>

山口さん「福岡の Kento さん。お願いします」

Kento さん「山口さんのお話を聞いていると、例えば先ほどの過去の茶室など、古典の部分を受け入れて、文化的な背景を考えて取り入れられる作品だとか、現代の電柱のお話とか、すごく面白くて、感覚的にいろんなところを取り入れられているんだなと思いました。そのアイデアをアウトプット、作品化するまでのスピード感、鮮度というのは、どのように捉えて作品化されているのでしょうか」

山口さん「私はそういうのはどうもやり損なう方で、パッパッとできるのがいいなと、自分では思っているん

ですけれども、遅いんですよね。考え過ぎてしまうんです。そのうちにくされてしまうようなことがあったりして。本当はエイっとやった方がいいんです。ただ、例えば誰か知っている人、描く前は、親なり、親戚の顔がぱっと思い浮かぶんですけれども、それを描いた途端に浮かんだ像まで消えてしまうというのがある時に、やっぱりそれを最初に出す出し方というのは、すごく慎重になります。だから最初から一気に図にしないで、もうちょっとふんわり、その周りの空気ごとといいますかね、あるいは半分言葉にしておくとか。言葉というのが、そのものを抽象してそぎ落とす言葉というよりも、もうちょっと豆腐が干からびないように周りの水ごとすくうような言葉で囲っておくみたいな。下手にイメージにしてしまうより、半イメージ半言葉。そういうのでやっています。そうは言っても、やらないとやっぱり消えてしまうので、その速さで言うと、まずは鮮度とそこに付随するものも含めた広い範囲をざっくりすくえる言葉でやっておいて、近付くのはちょっとずつ、それ自体が楽しいわけなので、少しでも心の触り心地が違ったら、『あ、これじゃない。これじゃない』と言って、いろいろ試す。ある種の速さと、それからそれを考え続けていくためにむしろ遅くするというんですかね。絵の具はむしろ乾かないようにするというような。そういうのでやっているような気がいたします」

ももさん「過去に生み出されてきた様式をまねすることで、様式が導く感覚によって自分がどこに行くのかということが大事だというふうにおっしゃっていたんですけれども、山口さんにとって、その絵を描かれて、向いている未来というのは、予測なのか理想なのか、あるいはそのどれでもないご自身の内なるものが引き出されるというような感覚なのか。どういう未来を向いているのかというところに、何か感覚をお持ちですか」

山口さん「予測は大体裏切られるというか、予測の通りになったら多分失敗なんです。つまり、その絵ができる前の自分の予測の通りになってしまったら、その１枚を描いて何の変化もなかったということですから、失敗なんです。それで、なぜこんなに描いてしまったんだろうということが起こるというのは、やっぱり画層みたいなものがあって、『ああいうものをちょっと描いてみよう』と、ある地点の過去において起こったことが、この辺(頭の右後ろあたり)から照らすんですけれども、それを求めるとき、私の場合はこの照り返しが右手前の方から呼ぶんですよ。“こだま”のようなものが。絵が画層を邪魔するんです。それは、『お前の手がつたないから、画層の通りに描けなかっただけじゃないの』ということかもしれないんですけれども、やっぱりすさ

まじい現実なんですね。支持台の上に何かが乗って、力を発揮しだすわけです。そうすると、『この人何とかしなきゃ』というふうにそっちに行きだす。その途端に、かつての予測であるところの画層みたいなものは、瞬時にバッと吹き飛ぶ。そこからは、即興に次ぐ即興です。何とか手綱でね、その猛獣みたいなものを軟着陸させようとするんですけれども、言うことを聞かないわけです。『お前、そこに行く？』というようなところに平気で行って･･･フーッと馬から振り落とされたような感じで、絵が終わるというんですかね。『あれあれどこに行っちゃったの？何これ？絵だ』みたいな。やっぱり描きたいと思ってやったものが、いつも後ろから風を送ってくれている感はあるんです。でも、それと全然違うものができちゃったけれど、まだ風が吹いているから、次の絵でやろうみたいな･･･」

山口さん「そのできた絵が、また違う風を起こしだしたりするわけです。最初の画層の通りにやろうと思っていたら、それは失敗なんですけれども、それは画層をこちらが覚えているからで、それを忘れたときに見ると、『こんな種が芽を出しかけている。ほうほうほう、面白いじゃないの』というので、絵というのは失敗しないのではないかなと。『だったら、あんなにビクビク描くんじゃなかったな』と思うときがあります。理想というのが何かにもよるんですけれども、意識できる自分というのとは違うレベルのものが呼び出されている。自分に染みついているスキルなり、アルスなりが、そこに噴出、表出してしまった痕跡というんですかね、そんな気がしています。それは理想なのかな。そういう理想というのは、多分、こっちで吹く、出てきたものはまたそれとは違うものなのかなと。今のご質問でつらつらと考えてみました。明日には違うことを言っていると思います。話半分で聞いていただけると。自分にとっては、そんな関係のような気がします」

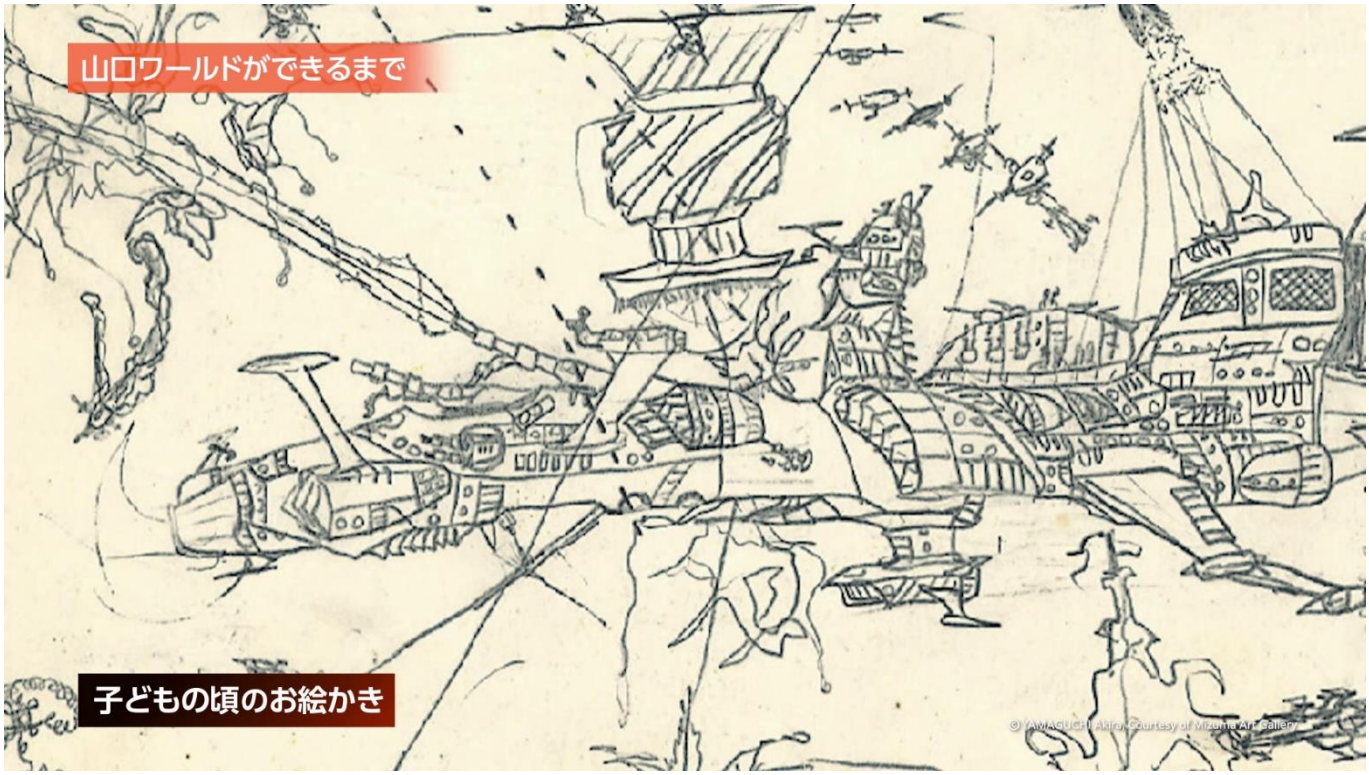
ももさん「予測から始まったかもしれないけれども、描くという身体的な行為とか描かれたものとの相互作用で、どんどん更新されていく、別のものになっていくというような感覚なんですかね」

山口さん「それがだから、どんどん変わっていってしまうんです。かつて面白かった絵を、今はこう描かないなと。らせんの２周目で同じものを描いた時、人が見ると、同じに見えるらしく、『ずっと同じだね』なんて言われるんですけれども、自分は結構、階段を登ったつもりなんです･･･言いませんけれども。変わっている

んですけれども、やっぱり同じに見えるんですね、結構変わったつもりが。ということは、自分という部分の根っこから伸びているその1周目と違うところに2周目がきた時には、少し伸びているというんですかね･･･」

<山口ワールドができるまで>

こんな頃があったわけですよ。この汚れなき瞳。良いですね。紙と描くものを与えたら描き出したらしく、このころから「お絵描き大好き」という人間でございます。



これは見るからに、松本先生のキャプテンハーロックの戦艦を元にした感じでございます。2 年生ぐらいですかね。この頃は、戦艦、戦艦、戦艦で、ちょっと説明的な絵になってはありますけれども、イメージの断片を描きつけたメモではなくて、紙という世界の中に自分が同化して描く絵というものが描けていて、それが楽しくてしょうがない。

言ってはいけないことを言ってしまうたちでしたので、地元の人間と衝突とかもあって、上級生 10 人ぐらいにずらっと囲まれた記憶があります。「謝れ」というんですけれど、頑として謝らない。でも、腕っぷしは強くないですからね、ギリギリとしながらやっていると、余程悔しかったんでしょうね、顔中にじんましんが出て、それを見た上級生が「うわっ、なんだ！こいつ」と言って、クモの子を散らすように帰っていったという記憶があります。そういうことで、父親から見ると、一人でちょっとかわいそうだなと思ったこともあったらしいんですけれども、私はそういうのを覚えていないです。子どもですからね、やったりやり返したりで。「次の年は妙に威張っていましたよ、山口さん」と言われたりするので、自業自得なんですけれども、そういう人間が、お絵描きとともに過ごしていて、あれをやっている時だけ、友達がやってくるような安心感があるんです。あの感じが好きでね。そうかといって、四六時中やっているわけではなくて、外にも遊びに行きましたし、ザリガニも釣りました。そんな中、ずっとお絵描きが傍らにあった。子どもというのは目の周りのものに序列をつけて見ないですからね。イメージだったら、絵はもうみんな絵。絵本だろうが漫画だろうが、アニメーションだろうが、何だろうが、全部“絵”なんです。

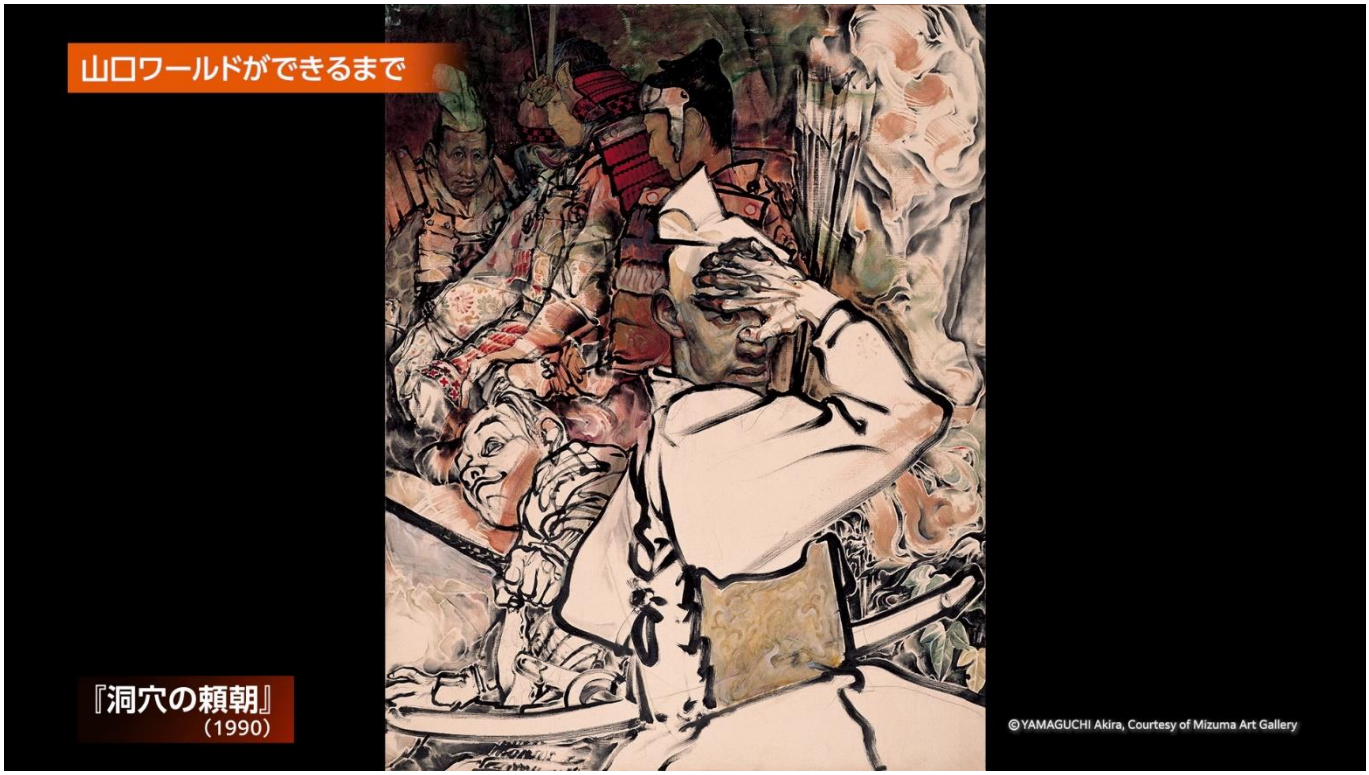
市の文化祭に出された名も知らぬ中学生が描いたちょっとシュールレアリスムチックな絵を、今でも覚えてますけれども、くぎづけになった記憶があります。ひび割れた大地の向こうに崖があって、その向こうに緑の原がのぞいて、それがポスターカラーのちょっとギトっとした筆致で描いてあって、「何だろう、これは。何だろう、これは」と。答えは一切ないんですけれども、純粋な謎がそこにポカっとあって、それをずっと見続けていた。そのときわかるんですよね、絵というのは“なぞなぞ”ではないんです。“謎”なんです。図像学とか隠喩とかありますけれども、ああいうのは“なぞなぞ”のたぐいでしょうね。教養で読み解くみたいなのは。そういうのとは違う“謎”というのがあって、それにやっぱり魅せられている。

でもその前に、この手業がこのイメージに追いつかないのを何とかしたいというときに、大学の門をたたくと、そこには当たり前ですけれども、「美術」というものがついてくるんです。これがやっかいなんです。日本にいると、西洋美術というものと日本美術、そもそも日本に美術はあったのかとか、そういう問題がいろいろシンクロしてきまして、面倒くさいんです。やっぱり習うときは、そういう“懐疑心”というフィルターをゼロにして全部を受け入れて、そこに身をさらすというのが就学者の心得ですから、全部浸っていくんですね。

日本で油絵を描くというのはどういうことなんだろう。なぜ遠い国の美術をここでやるんだろう。油絵って、

何。日本でどういう心持ちでやったらいいの。そういうときに、中村光夫の「『移動』の時代」を読んだんです。つまり、明治維新で工業の最新型を持ってきて、それをどんどん取っ替え引っ替えやっていくというメンタリティーが、文化に拡大されたことによって、文化という内発的なものを外発的なもので埋めていくという“習い性”が生まれてしまった。特に西洋美術とかそうですけれども、文学もそういうとこがあったらしいんです。ヨーロッパの潮流をとにかく持ってきて、やっとそれを昇華して次のものが生まれそうになると、本家ヨーロッパで次のものが生まれている。せっかく生まれたものがどんどん生き埋めになっていくということが、油絵の明治以降の歴史の最初にあった。そこにおいて、生き埋めにならないでそしゃくして展開していくにはどういう方法があるのか、頭で考えているんですね。西洋美術というものに自分は今いないし、過去の日本美術にも自分はいないわけです。でも、「日本において油絵は」とか何かやっていると、完全に自分というものの根っこからそれが切れていました。

ある日、学校に行って進級制作を描こうというので、3 年生の頭に、キャンバスの前に立つんですけれども、全く手が動かない。わからなかったんです。最初、それが何だか。単にアイデアが枯渇しただけかなとか、読み込みが浅いのかなと思ったんですけれども、そういうところではなくて、絵を描こうというメンタリティーに全くならない。心持ちが起こらないというんですかね。これはちょっと変なことが起こっているというのはわかって、ため息をつきながら家と学校を往復するんです。描けないときに、家に帰ってきて、ふと気づくと落書きをしているんです。「これは描けるじゃない」と。そうすると、学校でやる“あれ”と今手元でやっている“これ”が、完全に別になったんだなというのに気づいた。それはやっぱり真面目に、そこに沿っていく時に、思い違いがあったんでしょうね。出自と違うところに勝手に自分の身を置いてしまうと、養分が枯渇するんだというのがわかった。そうはいっても、西洋美術を全然知らない文化の国に育ってきたし、では日本美術を知っているのかというと、これも知らないわけです。だから、どっちもイメージなんです。西洋絵画のイメージと日本絵画のイメージ。



※映像（開始点 48 分 32 秒）とあわせてご覧ください。

これは日本の古手のもののイメージと、アビニョンの娘というピカソの絵が、ちょっと下敷きになっているんです。ヨーロッパ絵画が硬直したときに、違う世界の芸術の様式を乱暴にぶちこんで、その生命力で絵をよみがえらそうという絵があったんです。だから線画とか油絵とか、それからちょっと大和絵風な胡粉(ごふん)で塗った下地に線で起こしていくとか、そういうのをいろいろやって、そうやって生き埋めになってきた日本の近代というものを、もう一度、日本のメンタリティーで立て直すみたいな･･･それによって自分が生き埋めにならないで、のうのうと絵を描いて暮らしていけるようになろうみたいな、そういうのがあったんです。ただやっぱりこれもそういう意味でいうと、ちょっと理念に過ぎるところがあって、ここにもう一つ自分というものからの養分をたしていくというのが、それによって気付いたことです。そのときは怖かったんですけれどね。

油絵科、講評の場っていうのは、すごくフォーマルな場所だと自分は思っていたんですね。予備校に行っていたときに、自分が子どもの頃から描いているお絵描き的な、メカっぽかったり、ちょっと猟奇的な、乱歩とか横溝正史、夢野久作が好きでしたから、ちょっとオドロオドロしいものを描いたら、「山口、こういうのはデッサンができるようになってからだよ」と先生に言われたんです。それはちゃんと空間を取れるようになってからとか、それくらいの意味なんですけれども、自分は「そういう内側のものを出してはいけない、フォーマルなところなのかな、裸足(はだし)で足を投げ出してはいけない、いつも靴下を履いてないといけない、靴を履いてないといけないところなんだ」みたいな。何か、思い違いをしてしまったんでしょうね。

最初の飛行機の絵もわからないわけですよ、古い絵が。なんで全部俯瞰(ふかん)なんだろう。よく見ると、人は横からと足元だけ下だとか。なぜすごく低いところに雲が置いてあるんだろう。分からないから、現代人の頭で考えないようにしよう。とにかく習ってみて、体が慣れていくことによって、そこから湧き起こる感覚というものがたぶん正しいものに近いだろうから、とにかく考えないということでやってみて、描いた絵がこれなんですね。

そのときに、自分がお絵描きで、学校でないところで描いて、地元の絵の先生に送った年賀状があったんですけれども、その画題をやってみたんです。その先生には、人に見せないスケッチブックとかも見せたり、こういう趣味で描いたような絵を見せたりしていました。その先生はいろいろと甘やかしてくれるわけですよ。絵というのは、うんと甘やかされた方がいいと思うんですね。最初にうんと甘やかされて、そういう柔らかいしとねができると、次にどんなに厳しいことを言われても大丈夫になる。傷ついたらあそこへ行って、ふっと一息つけばいいというところができたら、人に見せればいいんですね。それまでは見せる必要はないと思うんです。

当時、私は油絵科でしたけれども、日本画の同級生ぐらいの子が、日本画は「岩絵具」というものを使って描くんですけれども、「アクリル」で描いた絵を出したら、教授が全員、その前を素通りしたという話を聞いて、こんなサインペンでクラフト紙なんかに描いたら、「お前、油絵をもう辞めたんだな」と、すっと全員に無視されて素通りされるんじゃないかと、怖かったんです。でも、もうそれをやらないと描けないから、これで素通りされたら、自分は田舎に帰って楽しく他のことをやろうと思っていました。

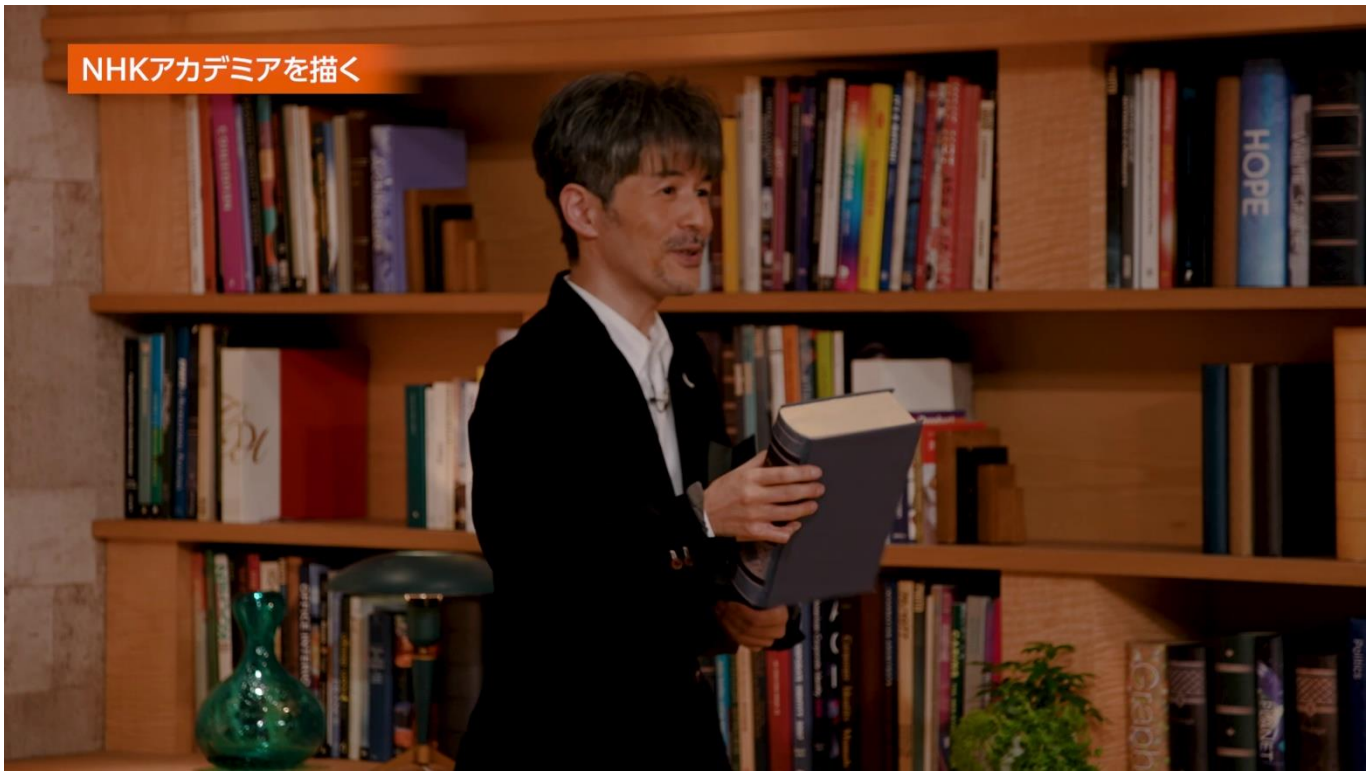
そして提出して、たまさかね、やっぱりうそのないところというのが絵に出ていたんでしょうね。そのときは、すごく好評してもらいました。先生も言葉が出てきやすかったんでしょうね。それもあって、すごく背中を押された感じで。だから、どんなに大仰なことをやるときでも、必ず“自分”から始める。自分から始めるんですけれども、それがとんでもない方に転がっていく。それはそのメディウムの力だったり、その様式というものが体を導いてくれるところだったり。様式というのは過去のものに見えるんですけれども、それに導かれて体を使い出すと、自分一人のものにカスタマイズされて、その瞬間に型が消えて、自分というものを十全に使い得るようになる。だからここからは、日本の古いものをトレースするのと、自分が子どものころに好きだったお絵描き、例えばバイクと馬を合体させたようなものを絵に平気で描いてしまったりするわけです。

※映像（開始点 53 分 32 秒）とあわせてご覧ください。

これもそうですよね。チコチコと描いていた絵と、大和絵というものの導いてくれる絵画性ですね。全く西洋絵画と違う画面構図をしていた。そうかこれは透視図法じゃないんだな。薄い面がレイヤーになって重なっていて、それによる奥行きか。そして、とても感覚に近い。視神経というよりは、認知の方に近い絵なんだなっていうのを、描いていくうちにだんだん気づいていくんです。あの“落書き”が呼吸するように続いていましたのでね、あれをしていなかったら、あのとき絵が描けなくなって戻ってこられただろうかと思います。「大したことじゃない。ちょっとつまずいたくらいだろう」と言われるんですけれども、そのとき自分は本当に怖かったんです。この世界にいなくなるのだろうかと。

怖さを感じるときに、その怖さをなぜ感じているんだろうというのを見てあげると、実はそっちに自分の進むべき道があったりするというのがわかりました。怖くないところというのは、結局“繰り返し”なんです。安心するところ。ですので、あれは学生のころでしたけれども、わりとその後の芯になったというようなことでございます。

<NHK アカデミアを描く>



※映像（開始点 55 分 12 秒）とあわせてご覧ください。

こういうスタジオを見ると、“フェイク”って言っちゃいけないですけれども･･･こういう置物の書物とか大好きなんですよ。かさ増しがしてあって、こういう“うそ”というのは、ハッとするじゃないですか。本当だと思ったら、全部“うそ”。あの怖さみたいな･･･。昔の建物の扉をガチャっと開けたら、掃除用具が置いてあったり。このスタジオの壁の 1 枚裏にも全く違う世界がある。その裏表の怖さみたいなのは、すごく感じます。

「描け」といわれましても、もう時間がたっていますでしょう。5 分ぐらいたっちゃいましたね。やっぱり“仮住まい”というんですかね、仮の作りというのはすごくドキドキするものがある。先ほどの「待庵」も残っていますけれども、やっぱり合戦のときのテンポラリーなものとしてできたはずなので、それゆえの即興性というんですかね･･･。

「NHK アカデミアを描け」と言われてもな･･･連れていかれるんですよ、副調室とかにね。「面白いでしょ。面白いでしょう？」と言われると、面白いと思ったものも、そんなに面白くなくなってくるんですね。こんなことを言っちゃいけないか。

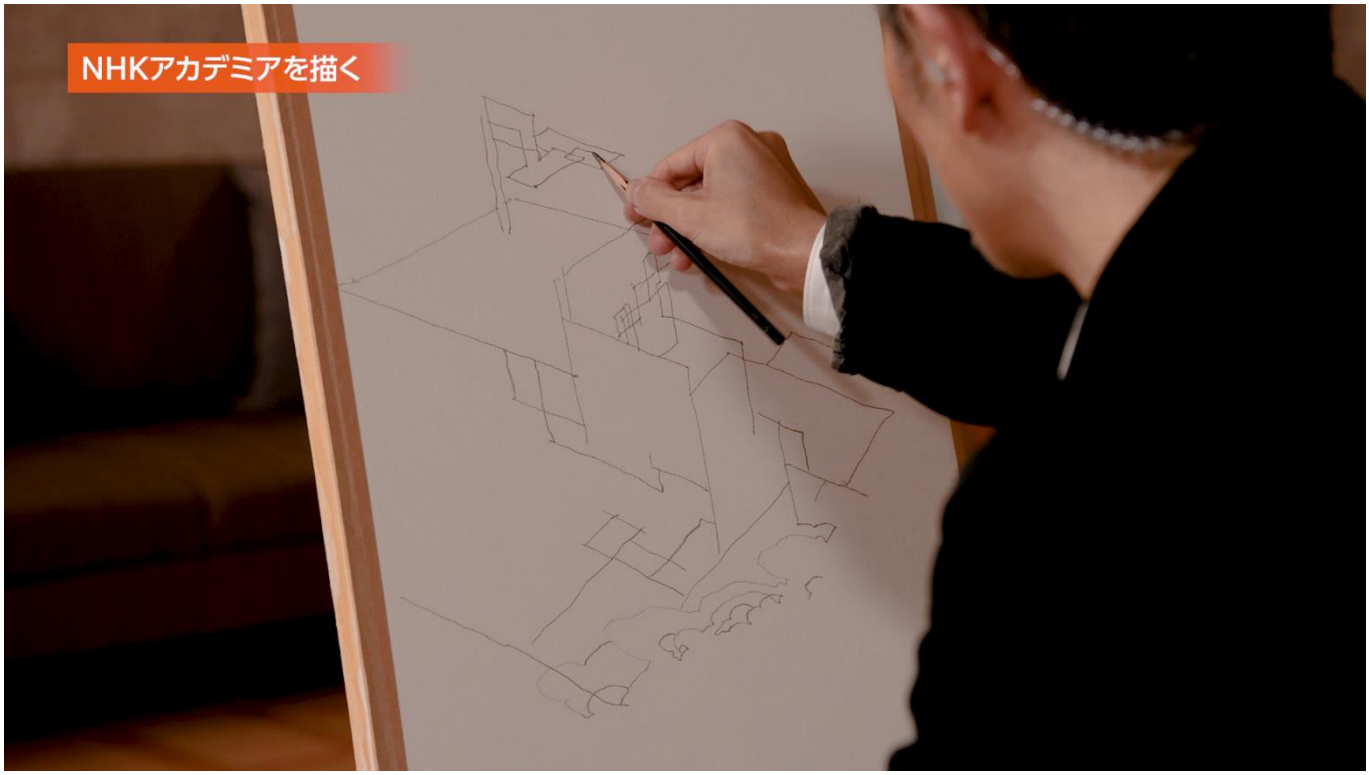
何かしゃべって描くぐらいの方が･･･ほら、電話しているときの落書きは、手がスイスイ進むじゃないですか。あのぐらいの方が楽しいときがありますね。本当にそういうとき、いい絵が描けるんです。あとは、さっき出たかみさんを描くとね、結構いい面白い線を引けるんです。全然、家族愛とかそういうんじゃないですよ。ちょっと描いてみましょうか。

あ、いい線ですねぇ。こんなものを見せられて、さっきまでの話が全部消えてしまう。ちゃんと描かないと。ここで「さすがプロ！」というものを描いて、皆さんをハッとさせないと。だから、しゃべりながら描くのがいいんですよね。

でも今日は暑いくらいでしたよね。私も今、嫌な汗をダーっと、脇の下にかいております。本当に、なんかうまく描けないな･･･。

でもやっぱり早起きして、午前の光とともに絵を描きたいなとずっと思っていて、最近ちょっとそれが実現できまして、9 時台とかに起きられるようになりました。何とかこの生活を固定したいなと思っている今日このごろでございます。

いただいた時間が 15 分ですからね。成田空港の絵も結構時間がなくて、急いで描いているんですけれども。筆を使うと、鉛筆では絶対に出ない表情が出ます。もちろん鉛筆もね、筆では出ない表情が出ますので、どちらもそれぞれの面白さはあるんです。



わりと線に導かれている感じが多いです。これを見ている方、そんなに面白くないと思うんですけれども、やっている本人はすごく楽しいんです。

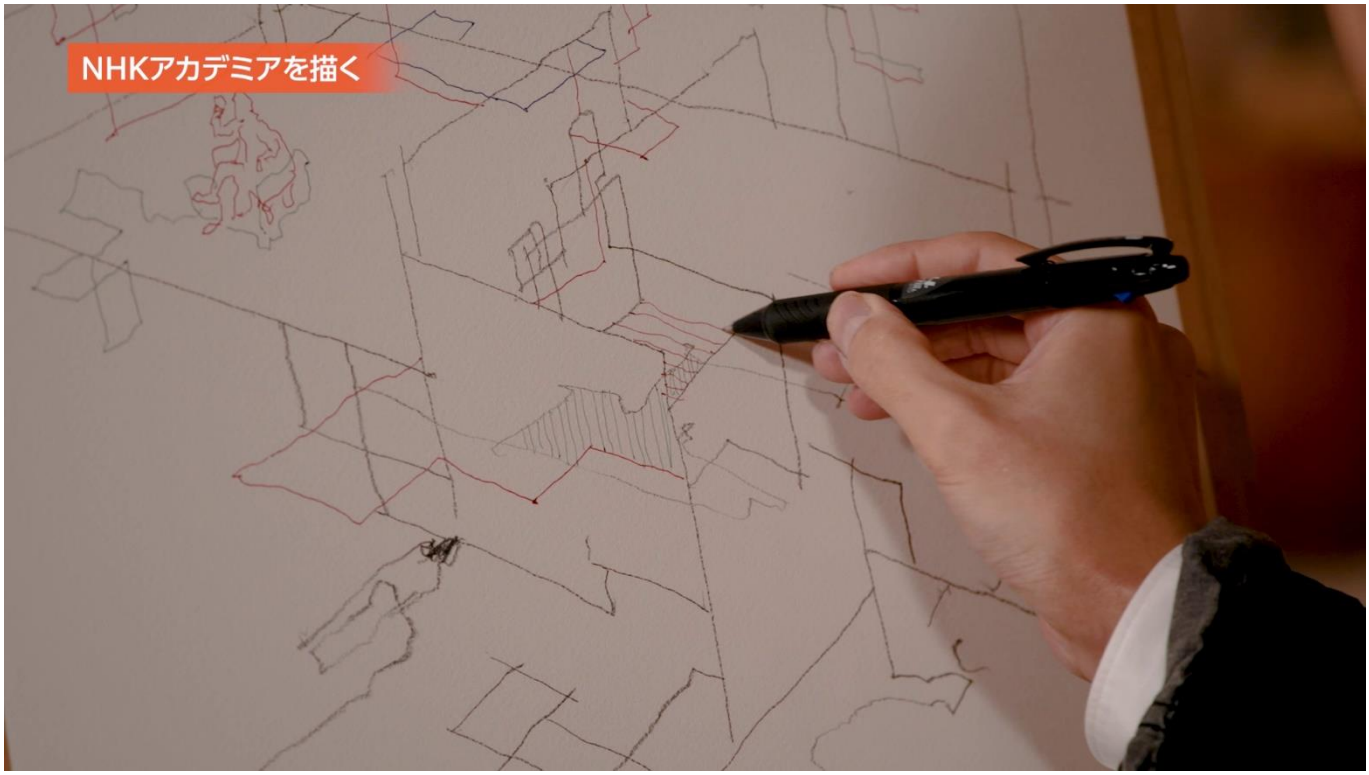
私、今すごい“ゲス”なことを考えちゃった！
“見せ合いっこ”みたいなね(笑)。ちょっと描いちゃダメですかね。ちょっと待って。河鍋暁斎みたいな･･･。

“見せ合いっこ”って、やっぱりこういうことですよね。大丈夫です。ちゃんと局部は隠しますので。洋装の場合、“見せ合いっ子”はどう描きますかね･･･？帰ったらカミさんに怒られるタイプの絵を描いてしまった･･･。

ここで“ユーモア”ってやつですよね。やっぱり札びらとかですかね。もうちょっとトンチがきくと良かったんですかね。わかりますかね。左の人は、“一反もめん”みたいなふんどしが下がっていて、「いったんはしまえ」と。それに対して「お前はさっさと出しな」みたいなね･･･わけがわからない(笑)。

そうじゃないですね。これね。「ＮＨＫアカデミア」を描いているんですね。どうしようね。色を使ってみようか。ああーちょっと面白いかも･･･。

んー何か無理やりだなぁ。15 分で仕上げるとおっしゃっていましたよね。あと 5 分。そうですか。ここまでで 10 分か･･･。



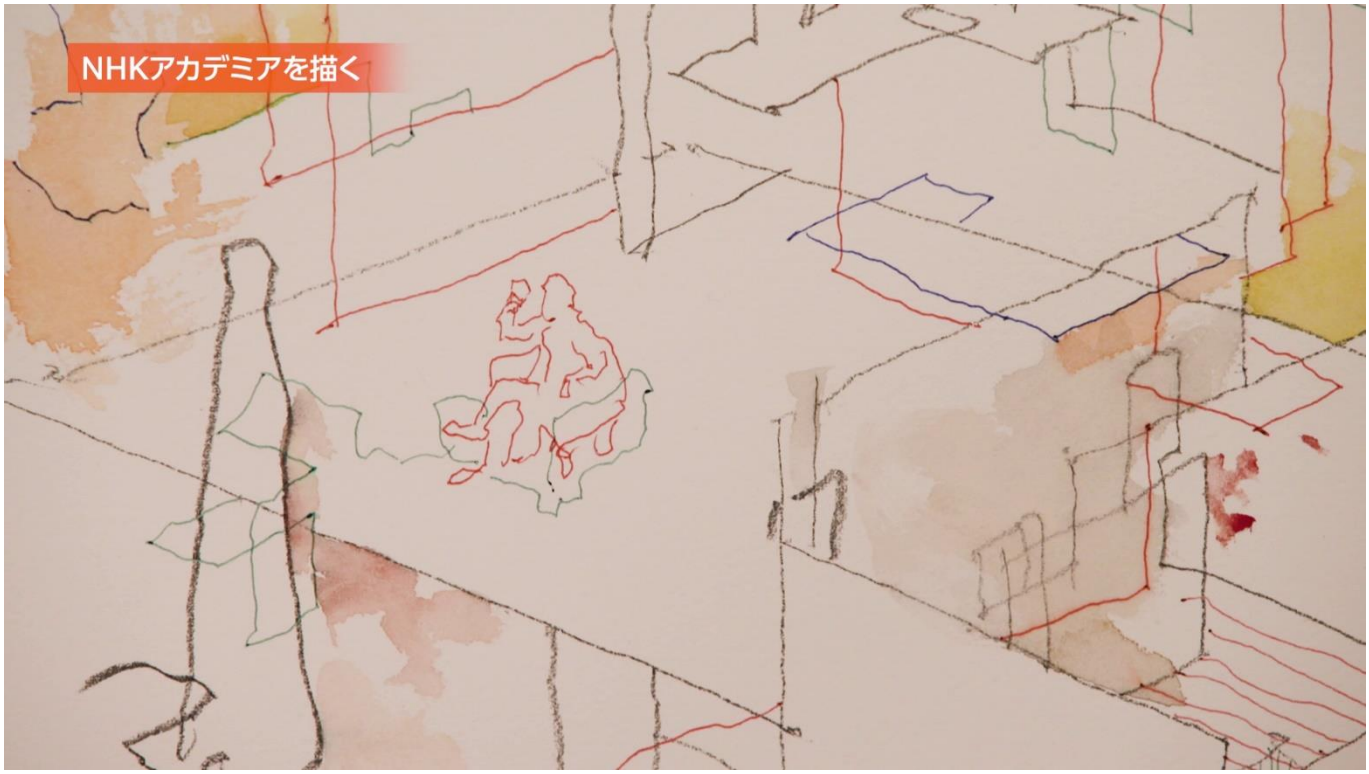
やっとやっと見えてきたよ。「アカデミア」。そうですね、いい下地ができたところのような。ちょっと一息止めて。これで。

すみません。こんな塩梅(あんばい)でございまして。完全に筆遊びですね。何かを描こうとする感じというよりは、やっている本人が楽しくて、周りの人はどうなんだろうと思いますけれども。

カメラに写らないかもしれないですけれど、スタジオの窓の外の木というのはシートに印刷された木なんですね。それがずらっとかかっていて、そしてその仮天井の部屋があったり、副調室があったり。2 次元を一瞬

3 次元にしつつ、また 2 次元に戻りつつ。この線という広がりのないものに行ったり、それがまた広がったりという･･･何か生まれそうになると、今度はそれをちょっと壊すような調子を入れて、それがめまぐるしく変わって、なにがしかの空間が見えそうな見えなさそうな･･･。ですから、その行為の中に次々と形が変転していくのが楽しくてやっています。

ちょっといい下地ができたね。これからもうちょっといろんな部分で、「ここも遊べるな。ここも遊べるな」というところがでてくる。「イッヒッヒ。ちょっと楽しいな」というのが始まった感じのところです。だから、電話でもうちょっと長話なんかすると、これを描くことがひたすらに続いていきます。



自分は楽しいんですけれども、何を描いたかと言われると、無理矢理、ちょっとしゃべっている私とカメラっぽいものを入れてみました。スタジオというものから始まって全然いいんですけれども、それが“スタジオの絵”になってしまうとつまらないわけです。絵のスタジオですが、ここにいる皆さんと交流する場で、それぞれの場が、同じようだけれども、全員違う足場にいる感じだったり、外と回線だけでつながっている人がいたり。今のも完全にこじつけですけれども、そう見るならば、そう見えなくもない。やっている時はやっぱりもうちょっと言語スキームではないもの、「今この線が、俺のここ(首)を、なでてきている」みたいな。この絵と神経系がひとつになった感じでやっているのかしら。

<絵が私を連れて行ってくれる>

※映像（開始点 1 時間 09 分 41 秒）とあわせてご覧ください。

「来迎圖」と題しておりますけれども、来迎圖ですから、阿弥陀様が臨終のときに迎えに来るという絵です。私が臨終を迎えるときに、走馬灯のように来し方が振り返られて、そしてなぜか糸を引く前立ちが、すぱっと糸を引いた途端に、実際の空間が破れて、そこからあちらの空間につながって、四天王を従えた阿弥陀様がやってくるんです。その阿弥陀様が仮面を取ると、そこには自画像があるという作品です。現代人を救うのは、結局自分でしかなくて、永遠に神には救われないというようなことなんでしょうけれども、救いのない救いの絵と言いますかね。

これを描いてるとき、私にしては大きめの展覧会で、わりとプレッシャーにさらされていて、それまでも自嘲的なところがある人間ですけれども、このときはそれが極まりまして･･･そういうことがありましたね。「何をやってもダメだ。これをやってもまた言われる」というようなのが極まったある日、絶望の底がパカッと割れまして、晴れやかな気分になったんです。異常な多幸感というんですかね。そのときに、なぜだか知らないんですけれども、「ダメだ」と今まで出されたダメとか、嫌なこととかを、片っ端から思い出している自分がいまして、そしてそれに対してこう言葉が響くんです。「だって自分が悪いんだもん」と。それは自罰的な言葉というよりは、自他の切り離しなんでしょうね。「これをやってみて、相手はそう思わなかった」。それだけのこと。私はこれをやる、相手はそう思わない。「私がこうやったから」とか、「私がこうやっているのに」というものが、その一言によって全部切り離されて、全部許せるんですね。今までの嫌なこと、悔しかったことが。

それが“悟り”とは言わないですけれども、悟りというのもいろいろ階梯(かいてい)があって、低い階梯で悟ったと勘違いして増上慢になるという話もありますから。お釈迦さまも菩提樹の下で 49 日間これをやったのかもしれないと思いながら･･･全部のことを許した上に、全部のことが見えてしまったんでしょうね。その末席の感じかもしれないなと思いつつ、あれをし続けて心穏やかにいるのが幸せというもののひとつなのかしらみたいなね。

その声というのがどこからしたのかわからないですけれども、それによって起こり得たことというのはやっぱりすごい実感となって、当人の中に残っています。そうすると、苦しみというのを取り去ってしまうこと自体、全員にこういうことが起こるとも限らないし、半分遊んでいるような絵描きがいたずらに悩んでいるから、そういうのになれたのかもしれないしみたいな。だから、何とも収まりのつかないような心持ちがぐるぐるぐるぐる回っていました。

絵を描いたからなれたとか、そういうつもりは全然ないんです。ないんですけれども、何か自分に起こること、起こる感覚に集中していくということをやっていると、いろんなことが起こるんです。もっと違う意識変容が起こったこともありますけれども、これはキリがないと言えば、キリがないですけれども、いろんなことが起

こるなと思った絵です。絵というものが私をどこに連れて行ってくれるんだろうか、ひょっとしたら全然違うものに変えられてしまうんじゃないかしらというのが、まだまださっぱりわかりません。バーンっと言っていい話にしたいんですけれども、ちんぷんかんぷんといいますか、本当にわけがわからない状態で、それだけにこれはまだ辞められないなという今日このごろでございます。

<Q＆A　パート②>

Kei さん「私は保育園から中学まで山口さんと同じ学校の後輩です。保育園のころから、山口さんはすごく絵が上手で、ご自宅で絵を描いてもらったこともあります。今、私は埼玉に住んでいるんですけれども、すばらしい作曲家とか作家、芸術家の方、あとは数学者の方も、幼少期に自然の豊かな環境で育ったと言われているのを読んだことがあります。山口さんの故郷の自然とか、小中高と生まれ育った環境にインスパイアされるところは、今の年代になってあるでしょうか」

山口さん「群馬の桐生ですから、大自然というよりは中自然・小自然という感じのところです。人の住んでいる小都市に、それでも自然が強引に割り込んでくる。日本の自然はやっぱり強いですから、油断していると雑草があっという間に生えて、そんなひとつからでも子どもはそういうものを見たかもしれないし、圧倒的に自分ではないものがそこにあって、快適さというのとは違う、そこにある葉っぱをひとつつまんでスーっと触れるときに、やり方が悪いと簡単に指が切れるとか、名も知らない虫に刺されて腫れるとか、これは何のために起こるんだろうと、全くその意義も意味も分からないけれども、明確に自分を侵してくるものが外界にあって、その中に例えば人為の産物である電柱とか建物、それも日本家屋なんていうと、その構造がそのまま外見に出てきたような、木を組んでトタンを打ちつけて、壁土に塗ってあるなみたいな、それこそ工程がそのまま形になったようなものが見えるときに、人と自然の境目が溶けていくというんですかね。自然の自然と、その人の自然というのかしら、あり塚のように人が営んでいったものによってできてくる。そういうのがシームレスに

つながってくる。

でもそこに人だったら人の意思があって、自然だったら何か分からないけれども、これも何かによって成り立っている。自然の大きい小さいというよりも、そういうものに開かれる体験があればよくて･･･本当の大自然では人は生きていけないと思うんです。自然の周縁のちょっとしたところでようやく生きていけるので、自然が大事だと言って、大自然の中に放り込まれたら、私たちは瞬時に死ぬと思うんです。ようやくいられるところで、自然とやり取りして、『こういう自然なんだな。半分は人の手で･･･』というのが見えてくる。“やり取り”というものを何となく覚えるということの方が、いろんな声が聞けるようにはなっていくと思います。答えになっていますでしょうか」

MGJ さん「これまでにさまざまな作品を発表なさっている山口さんですが、今後挑戦してみたいと思っている題材やジャンルなどはありますでしょうか」

山口さん「よく聞かれるんですけれども、場当たり的にやっておりますので、全然わからないというのがあります。ダラダラお酒を飲んで、宿に泊まりながら全国をまわって、それを絵にして、全部経費で落とすとかやってみたいななんて思うことがあります(笑)。でも、油絵科だったものですから、墨とか疎かったんですね、この歳になるまで。墨で描くのは面白いんじゃないかしらとか、ちょっと一段落というのではないですけれども、全然あの方面をお留守にしていたなという技法的なことがいっぱい出てきました。特に何かということではなくて、普通に絵描きさんならやっているようなことで、自分がやっていないというものが結構見えてきたものですから、墨もそうですけれども、そういえばちゃんと油絵も描いてないなみたいなのもあったりして、今更にそういうのもやってみようかなと思っております。一度やって、いろいろ他のことをやったあとの２周目というのは、やっぱり同じではないと思うんです。らせん状に少し浮いていくといいますか。むしろ同じ手法なり材料なりでやることで、また違う彫りどころが見えてくるというんですかね。そんなことをやってみようかなと思っているところです」

先ほどの「来迎圖」の時に、人がいろいろなことを言ってくるというのがありました。本当に本当にいろいろ言ってくるんですけれども、やっぱり聞いた方がいい話というのはもちろんあって、それは自分をずっと見ていてくれて「これはこういうことが起こっているな。そうすると、こういうのももうちょっとできるんじゃない？」というのと、何にも見ていない、ぱっと見て、それがその人の気に入らないからといって、「こういうのは良くないよ」というのでは、違うと思うんです。あらかたの意見というのは、つまりその人だったらこうしてほしいという自分の希望を言っているんですね。こういう絵は良くないと思っているのは、私はこういう絵を見たくない、もっとこうしてほしいという、その人の希望を言っていたりする。そういうのはやっぱり聞いちゃダメなんですね。言った本人も流転していますから。「その通りにやりましたよ」と言っても、「え？何のこと？」とか、「いや、こうじゃないよ」と言ったりするんです。そんなときに真に受けてやったら、もう収まりどころがつかない。それだったらやっぱり、そういう話は遠ざけて、「そうですか。伺いました」と言って、やっぱり考えるのは自分。わかると思うんです。この人は親身になって言ってくれていると。そこは考えてみて、必要なら取り入れるし、やっぱり僕はそうじゃないと思ったら、それは無しにして。

学んでいる時というのは、自分のガードを下げていますから、聞き過ぎてしまうんですね。絵なんていうのは、本当に内面とつながっていますから、ちょっと言われると、薄皮を剥いだところって、触るだけで痛いじゃないですか、ああいう痛さなんです。そういうことを言う方も、本当に気をつけいといけないし、無理やり見つける必要はないと思うんですね。例えば、絵の輪郭は見つけようとしなくて、たださっき言ったような感覚とか、そういうものに導かれていくと、そこに何か出てくる。2次的な反射のような、そういうことで聞くしかないので、自分というものを確認していくしかないんじゃないですかね。事後的にわかるんだと思います。ですので、焦らずに、のんびりゆっくりと、自分の道を進めばいいんじゃないでしょうか。そんなことを偉そうに申してみます。失礼しました。長時間、ありがとうございました。